

日中国交正常化による日中間の野球交流が その後の中国の野球活動へ及ぼした影響 —1945年から1960年までと1972年から1989年までの両期間の野球活動の比較—

松岡弘記*, 李俊兰**, 樊孟***

I. はじめに

中国へ野球が伝来したのは、1895年であり、そこから中国野球活動は発展をみることができ。しかし、1937年日中戦争勃発^{注1)}から1945年8月に終戦を迎えるまで中国ではこの戦争のために野球活動が中止された。その後、1949年の中華人民共和国の建国^{注2)}に伴い政府が体育活動の推進に力を入れることにより、野球活動は復活するのであるが、しかし、1961年に中国経済が困難^{注3)}となり、体育事業の発展規模を縮小し、野球は保留種目となり、全国の野球活動は停止する。その状況は文化大革命^{注4)}途中まで続き、1972年に野球活動の復活がまた始まる。また、同年日中国交正常化^{注5)}となり、日中の野球活動の交流が再開し、多くの野球交流活動が両国で行われた。

この1972年の日中国交正常化による日中の野球活動の交流の再開により行われた野球交流は、その後の1980年代末までの中国の野球活動の発展推進に本当に貢献できたのであろうか、また、その交流によってどのような中国野球活動への発展をもたらしたのであろうか。これまでその日中野球交流の評価は明らかにされておらず、その間に行われた野球交流が中国の野球活動の発展に影響をもたらしたのかは大変疑問である。

これらの疑問点を明らかにするために1945年の日中戦争終戦から1960年までの中国野球活動の状況を把握し、1972年の日中国交正常化から1989年までの中国の野球活動状況を前者と比較して、どのような野球活動の違いが生じてきた

のかを明らかにする。次にその違いが、1972年の日中国交正常化以降の野球交流活動による影響によって生じたのかを検証し、日中の野球交流活動が、その後の中国野球活動の推進発展に貢献したのかを明らかにすることを、本研究調査の目的とした。

本研究調査に用いたのは、『中国棒球運動史』^{注6)}であった。本著は中国野球の誕生とその後の発展の歴史に関して詳細に書かれており、筆者が知る限り中国野球のその歴史的発展が書かれたものは本著のみである。これ以外に中国の省や市の野球誕生と発展の概略史は、各省や各都市の『体育志』^{注7)注8)注9)}にみられるが、極めて簡略な記載しかない。このため『中国棒球運動史』^{注6)}だけから本研究調査を行った。本著のⅡ. 1945年の日中戦争終了後から1960年までの中国における野球活動、Ⅲ. 1972年の日中国交正常化から1980年代末までの日中野球交流、Ⅳ. 1972年の日中国交正常化から1980年代末までの中国における野球活動については、『中国棒球運動史』^{注6)}からその概要を各々まとめた。

Ⅱ. 1945年の日中戦争終了後から1960年までの中国における野球活動^{注10)}

1. 体育活動としての野球の復活と発展

1947年、台湾の石炭野球チームが上海に訪問し、復旦大学野球チームと熊貓野球チームと試合を行った。上海東華球場はこれまでかつてない程の黒山の人だかりとなった。

1948年、第7回全国運動会が上海で行われ、野球は公開競技として、上海、広東、空軍、台

* 愛知大学現代中国学部教授

** 天津財経大学珠江学院外語系講師

*** 愛知大学現代中国学部非常勤講師

湾の4チームが参加し、台湾が優勝した。

1949年10月1日に中華人民共和国が成立し、新しい社会主義体育が、国家建設事業の一つの重要な柱となった。政府は体育活動を発展させることは、人々の健康状況を改善するのに一つの最も積極的な有効の方法であり、指導を強化することが必要であることから、大衆の体育活動を学校、工場、鉱業、部隊と役所で行わせ、これらの体育活動を推進した。

毛沢東は「体育活動を発展し、人民の体力を増強せよ」のスローガンを掲げ、中央人民政府体育運動委員会^{注11)}を設立し、体育活動の普及と経常化を大きく推進させた。

建国後、野球はその他の球技と同じように、また、スピーディーな回復と発展を遂げた。特にその部隊の中の発展は、広範囲であり、その勢いは激しかった。

しかし、この時期に野球活動が最初に回復を開始したのは学校であった。1952年、天津に中学生で組織された北斗星野球チーム^{注12)}が作られた。そのコーチは、国内外に著名な華僑の元日本プロ野球選手の劉瀬章と鮑賢慶であった。彼らは力を尽くして優秀な選手を育てて、天津市、河北省代表チームが参加した全国野球大会で良い成績をあげて、天津地区の野球を大いに発展させて育成した。

1956年、政府は野球を全国競技計画に取り入れ、野球を推進するために全国野球公開競技会を行い、並びに毎年全国的な野球大会を行い、第1回全国野球大会を準備しながら、各省・市の野球の発展を促進した。第1回全国野球大会の参加チームは上海、齊齊哈爾、旅大、延辺自治州の4チームであり、上海が優勝した。これ以降、野球は急速に全国多数の省・市で発展する。

北京で組織的に野球の大会が行われたのは、北京市高校競技委員会が成立してからであった。1956年、清華大学、北京大学、北京工業学院、北京外国語学院、北京地質学院、北京師範大学が相継いで野球チームをつくり、毎年一度、高校野球の大会を行った。それ以後、また、北京化工学院、機械学院、北方交通大学、政法学

院、体育学院、医学院等が参戦し、高校が次第に増加したため、2つの地区に分けて大会を実施した。

1957年8月に沈陽で全国8地区野球選手権大会が行われた。上海、天津、旅大、沈陽、延辺、北京、広州、齊齊哈爾の8チームが参加し、上海が優勝した。

1958年、北京市第1回運動会で野球は高校と各区省を参加単位とした。北京体育学院から主に選ばれた選手で構成された高校チームが優勝した。

1958年6月に上海と旅大において全国野球地区対抗戦が11の地区から12の代表チームが参加して行われた。上海大会参加のチームと順位は、上海紅隊、上海藍隊、天津、広州、南京、杭州であった。旅大会参加のチームと順位は、北京、唐山、延辺、旅大、沈陽、齊齊哈爾であった。

1959年、北京で第1回全国運動会^{注13)}が行われた。野球は正式競技種目となった。試合に参加したのは、各省、市、自治区と解放軍を合わせて23チームであった。北京チームは北京体育学院の野球チームが主なメンバーとして参加し、優勝した。

天津や北京の都市を除いて、1950年代から1960年代初めにかけて一部分の省や市が組織した野球代表チームが相当あり、異なるレベルの競技活動を展開し、地方運動会の試合に参加し、野球は急速に発展した。

1960年、全国野球地区対抗戦が6月に蘭州、天津、上海の3ヶ所に分かれて行われた。24の野球代表チームが参加し、蘭州地区大会の順位は、海軍、陝西、四川、甘肅、青海。天津地区大会の順位は、八一軍、河北、遼寧、山西、山東、吉林、河南、黒竜江。上海地区大会の順位は、上海一軍、湖北、空軍、広西、江蘇、上海二軍、福建、広東、湖南、浙江、安徽であった。

ある一部の参加チームは、一般大衆による野球活動にて作られ、地方運動会を経て選抜組織されたものであった。同時に、全国6ヶ所の体育学院^{注14)}では、また、野球・ソフトボールが並んで必修課程として取り上げられ、教学大綱が編集された。1960年、国家体育運動委員会は

体育学院系統の編集教材を調べたところ、野球・ソフトボール課程の内容は相当な比重を占めており、重要視されていた。

国家体育運動委員会は1958年まで成都体育学院で全国6ヶ所の体育学院ソフトボール対抗戦を実施し、今回のソフトボール対抗戦は1959年の第1回全国運動会の野球種目を創設する布石となった。この全国運動会に参加する省・市野球代表チームの多くは、当地の体育学院の男子ソフトボール選手を起用しており、成都、西安、武漢、沈陽、上海、北京の各々の体育学院の野球とソフトボールの選手の大多数は各自の省や市の代表チームに加入して全国運動会に参加した。

特に全国運動会の野球で優勝した北京チームは、その主要選手の全員が北京体育学院の学生であった。国が認めた野球の優秀選手の中、北京体育学院生が北京チームの70%以上を占めた。他に体育学院は、野球人材を養成し、中国野球活動の事業を発展させた。

建国初期の野球活動は以下のいくつかの特徴がある。第1に、まず、最初に学校と軍隊から野球が復活してその発展がなされた。同時に野球とソフトボールは大同小異であるため、ソフトボールの発展は比較的簡単であり、そのためにソフトボールから始めて野球へと転向が行われた。かの著名な上海の熊貓チームは、ソフトボールから始めて、その後、有能な人は軟式野球と硬式野球に転向して取り組んだ。

第2に当時の体育事業は、人々の健康状況の改善と体力増強が目的とされ、体育の普及と日常的な実施によって大きく推し進められた。このために野球・ソフトボールは、広く推し進められ、普及の主役となり、場所と道具がある地区が真っ先に発展を遂げた。

第3に国家体育運動委員会が競技規則を作成して頒布し、全国競技制度が建立され、1956年から野球・ソフトボールを全国大会に参入させた。この時から野球・ソフトボールの技術レベルが次第に上昇し、海外交流をして帰国した華僑によって、次第に新技術を導入した。

第4は旧中国に、自ら体験してこれを実行し

た野球事業者と帰国華僑が熱心に指導したことが、普及発展の大変重要な要因の一つとなった。また、同時にいくつかの体育学院の新設も、野球・ソフトボールの発展と人材の育成にもまた、重要な働きとなった。

第5は、中国人民解放軍^{注15)} チームが継承した戦争時代の野球活動の栄光に伝統があり、率先して全国規模の野球大会を作って実施し、中国の1950年代野球の発展を推進し、中国野球史上の輝かしい1ページを飾った。

1952年から1960年の9年間に全国レベルの野球大会は、10回以上もあるのに対して旧中国の40年間で全国レベルの野球大会は、6回だけであり、急速に野球が発展した。

しかし、1960年の野球大会以後、1961年から中国経済が困難な時期を迎え、体育は中国共産党の「調整、強固、充実、向上」の方針を貫徹し、体育事業の発展規模を縮小し、野球は「保留」種目となり、全国野球大会は停止した。

2. 八路軍による野球の復活と発展

野球は軍の部隊兵士の軍事演習に十分に有益であるため、早くも戦争年代から、八路軍^{注16)}は野球をする伝統があった。全国解放以後、戦争は減少し、部隊が休業を取り整備する段階で野球は比較的快適に発展した。6大軍区以外を除いて砲兵、空軍、海軍各部隊では、全てが野球を発展させ、その上、野球専門家が招聘され、指導が行われた。華東軍区では、劉瀨章が招聘され、西北軍区では董守義が招聘され、海軍部隊と西南軍区は前後して梁扶初^{注17)}が教えを執った。

建国初期、青島の海軍、呉淞基地および東海艦隊は、みんな野球を行い、青島では青島基地高砲営が最も発展し、夕飯後、中隊と中隊、小隊と小隊の間に日常的に試合を行った。それに青島海軍医院の中に一群の日本籍軍医と看護師がおり、彼らの多くは野球をすることができたことにより、一緒に試合を行い、野球活動が頻繁に行われた。

建国初期、西南軍区所属部隊の川東、川南、川西、川北、西康、貴州、雲南など軍区分野球チー

ムが比較的活発に発展した。成都が解放されてまもなく、成都駐在の警備師団が少城公園で四川大学野球チームと友好試合を行った。昆明に進駐している第13軍37軍師団および所属部隊もまた、常に野球活動を発展させた。雲南軍分区文化部では野球知識の小冊子を作り、部隊に分配し、なお一層、専任の人を工兵丸団駐屯地に派遣し、野球活動を発展させた。川西軍分区の野球チームは、常に駐屯地にある華西大学、四川大学野球チームと試合をした。西康軍分区の公安部隊の野球活動もまた、大変活発であった。

1951年3月、四川にある銅梁で西南砲兵第1回運動会を行い、野球は主に新しく軍隊に入った青年からなる砲校隊と文工団および砲兵隊機関からなる砲直隊が対戦した。

1951年5月、西南軍区で第1回運動会が行われ、野球に参加したのは、砲兵、公安、西康、雲南、川西、川北軍分区チームであり、雲南軍分区チームが優勝した。西南軍区は全軍運動会を迎えるため、この運動会で1位、2位を獲得した二つの軍隊隊員が主となり、各隊の最も優秀な選手を集めて西南軍区の戦闘野球チームを構成した。戦闘野球チームは常に部隊の低層部へ行って公開試合をし、指導と訓練班を開設し、その前後に雲南、貴州、西康、江津、雅安等の地の部隊に至り、戦士の歓迎を深く受けた。

1952年8月に北京で中国人民解放軍の第1回全軍運動会が行われた。各大軍区を除いて各軍区の種類と直属の単位の代表団の他、なお、朝鮮戦争の前線から中国人民志願軍代表団が参加した。その中で野球は、新中国が成立後、初回の全国規模の野球大会であり、全国の野球の発展に対して、重要な推進作用を引き起こした。全軍運動会野球大会は、華北、西北、東北、西南、中南、華東6大軍区および海軍と公安部隊の8つの野球代表チームが参加し、華北軍区野球チームが優勝した。

1952年12月上海にある華東海軍司令部が海軍体工隊を正式に成立させ、梁扶初が海軍野球チーム指導の初担当として招聘された。彼の厳しい練習指導により、1953年、南京軍事学院内で北軍区野球チームと友好試合をした。

当時、華北軍区所属部隊の連隊、大隊、中隊、小隊にほとんどみな野球チームがあり、各級の隊長もまた自分から参加し、その中で最も砲兵のレベルが高かった。華北軍区の戦友野球チームの選手の多くが自ら砲兵から来た張舒愨、陳春蘭、劉冬年、魏宇恩、鄒国忠、楊洪源などであった。彼らは第1回全軍運動会の野球大会中、絶対的優勢をもって優勝を獲得し、賀龍^{註18)}から招待され、西南各地の巡回公開試合を行い、野球指導も行い、戦士達の歓迎を深く受けた。

1953年初め、西南軍区の戦闘チームは重慶で華北の戦友チームを迎え、西南地区の巡回公開競技を行った。試合前の歓迎式において賀龍が現場に来て両隊隊員一人一人と握手をし、戦友チーム選手に対して「私の招待と中国人民解放軍総政治部が、あなた方戦友チームをお招きする。全軍の最も優秀な優勝チーム軍が西南へ公開競技巡回および野球指導に来て、あなた方に包み隠さず全部彼らに教えて欲しい」と述べた。また、戦闘チームに対して「あなた方は誠実に謙虚に彼らの技量を学び手に入れて欲しい」と述べた。賀龍は和やかに談笑して、親しみやすく、その場にいる一人一人の心を深く鼓舞させた。

1954年、梁扶初が初招聘を受けて四川に入り、戦闘チームコーチの任務を受け持ち、賀龍から親身な接見が行われた。賀龍は「あなたは野球専門家であり、広い知識と真の才能があり、あなたの指導の下で、部隊と全国の野球を奮起させることを期待している」と述べた。また、自ら梁扶初の教学とコーチ表演を視察した。梁扶初は厳しい練習指導を行い、戦闘チームのレベルを迅速に高めた。

この年の夏に梁扶初は初めて上海遠征にチームを率いて相継いで華東軍区、華東工程兵、華東公安兵チームおよび上海青年チーム、高校チーム、上海連チームなどと、淮海路広場で友好試合を進行し、多勝少敗であった。

1955年、各野戦軍の編成を撤回して取り消した後、北京軍区は戦友野球チームが、華北、西南、華東3大軍区の主力を集中し、その実力はさらに向上した。

しかし、1955年すぐに各大行政区および大野戦軍制度が廃止され、部隊の位階制が実施され、軍縮再編成することで、部隊の野球活動の発展は停滞した。

第1回全国運動会を迎えるため、1959年5月に北京で第2回全軍運動会が行われた。第2回全軍運動会の野球試合は沈陽軍区、北京軍区、新疆軍区、蘭州軍区、成都軍区、昆明軍区、武漢軍区、南京軍区、広州軍区、福州軍区、済南軍区、上海警備区、空軍、海軍各チームの14の代表チームが参加し、北京軍区チームが優勝した。

第2回全軍運動会の野球大会後、選抜によって北京軍区隊を主とする解放軍(八一)野球チームが結成されて第1回全国運動会に参加した。彼らは全国2位を獲得した。

1960年、全国野球分区対抗戦が行われ、八一チームと海軍チームがそれぞれ天津地区と蘭州地区の1位となった。

建国後、中国人民解放軍は戦争時代の伝統を継承し、1952年の全軍運動会上で一番先に、全国規模の野球大会を行い、全国野球活動の発展を促進した。しかし、1961年から国内の試合が無くなったために、活動を中断することになった。

Ⅲ. 1972年の日中国交正常化から1980年代末までの日中野球交流^{注19)}

中国の体育国際交流活動は、国家対外活動の一部分であり、対外政策と同時に、体育事業発展の需要を高めることが求められた。中国の体育事業計画者と運動選手はこの精神に基づき、友好を強化すること、技術交流を図ること、世界進歩と平和願望のために、積極的に国際体育交流を進展させ、友好の使者となって国際交流の先陣となった。

1972年の日中国交正常化により、日中間の野球交流が始まったのは、1975年5月、日本神戸市の友好の船野球チームが天津を訪問し、天津野球チームと公開競技を行い、四川、甘肅、八一、陝西などのチームが見学したことに始まる。これが中国建国以来の外国野球チームの第

1回目の訪問となっている。また、同年8月、日本の愛知工業大学野球チームが訪問し、西安、成都体育学院、北京、天津、沈陽、八一、上海の7つの野球チームが西安、北京、上海の3地点に分かれて親善試合をした。中国は全敗し、野球技術レベルの差は大きく、試合を通して学んだことは多かった。

1976年と1979年、日本の有名な野球コーチ曾先が中国の野球指導のために来た。同年7月に、別当薫^{注20)}が団長で山田潔^{注21)}、大橋勳^{注22)}が団員である日本プロ野球コーチ団が、初めて中国へ野球指導に来て、北京、八一、上海野球チームの練習で指導を行った。また、同年8月に日本の東京六大学リーグ戦で優勝し、日本一の大学野球チームであった法政大学野球チームが訪問した。上海、西安の両地区で上海、北京、陝西、甘肅、八一等の野球チームと5試合行った。実力が相当にかけ離れて差があるため5試合全て中国チームは負けたが、双方とも真剣に試合に臨み、友好的な雰囲気であって、試合以外にも合同練習と親善交流をした。日本チームのその積極的な友好的な態度と巧みな野球技術レベルは、観衆の熱い賞賛を得た。

1977年8月、張毅を団長とする野球視察団が初めて日本へ訪問した。随行者は野球コーチの曹岳鐘(北京)、王銳(天津)、張舒慤(八一)および甘肅チームの投手の王永平などであった。

2週間の訪問の間、東京、名古屋、大阪、横浜を参観した。東京では巨人と阪急の両プロ野球の試合を観戦し、巨人と大洋の練習を参観し、両チーム監督の長嶋茂雄^{注23)}と別当薫と技術座談会を行った。また、別当薫監修の『野球技術映画』を参観し、日本セントラルリーグ審判部長によって、規則と審判法問題に関する座談会が行われ、さらに、伊藤広極部長によって日本とアメリカの野球運動概説の座談会が行われ、日米の優秀な野球選手の試合録画を鑑賞した。また、日本野球博物館^{注24)}、東京後樂園野球場^{注25)}と東京オリンピック体育館^{注26)}を見学した。

名古屋では、愛知工業大学の試合前練習を

参観し、大阪では、第59回夏の甲子園野球大会を参観し、横浜では新しく建設した横浜ベースボールスタジアム^{注27)}を参観した。

これらの活動を通して、日本野球の技術、戦術、練習、試合、審判、球場施設などの項目内容を全面的に視察し、参観訪問を通して、先進地からは学ぶところが多く、視野を広げ、知識を高めることができた。この交流活動は、中国の復活始めた野球が発展するのに大きな有益をもたらした。

1978年10月、北京野球チームが代表となる中国野球学習班が野球技術を学びに日本へ訪問した。東京ではプロ野球の読売巨人軍の練習を6日間受け、横浜では大洋の練習を7日間受け、大阪では阪急の練習を3日間受けた。その他に東京では日本鋼管の練習を3日間受けた。日本鋼管はノンプロ企業チームであり、半日仕事をし、半日練習を行う。彼らのレベルはプロチームの次であり、大学チームよりも高かった。19日間の練習中、基本技術練習の重要性がさらに認識させられた。

巨人チームは口々に「基本技術なくして進歩はない」と言い、毎日練習、反復練習を強調した。

高レベルのプロ野球チームでさえこのようであり、アマチュアチームは当然ながら、さらに練習しなければならない。特に彼らの厳しい練習態度は中国選手に良い体験をさせてくれた。日本の友人が、練習現場を撮影録画したものを贈ってくれて中国の野球発展に熱心に援助してくれた。これにより旧技術を淘汰して新技術を取り入れることができ、中国野球発展の道を探索させてくれた。

1979年7月に、日本の愛知工業大学野球チームが2度目の招きに応じて北京、上海を訪問した。北京期間では、北京、天津、八一チームと3試合親善試合を行ない、愛知工業大が全勝した。次の上海期間では、上海、甘肅、陝西チームと3試合を行い、また全勝した。

同年7月、山田潔団長の日本野球コーチ団が招きに応じて来訪し、北京、天津野球チームの練習を指導し、この活動と合わせて全国野球コーチ練習班を立ち上げた。

団体の陣容は、団長が山田潔（元プロ野球選手で巨人と大洋の内野手、当時、アシックス体育会社顧問）、顧問が池田恒雄^{注28)}（『ベースボール・マガジン』社の社長）、団員が大友工^{注29)}（元巨人投手）、鈴木陽一（野球評論家）、大橋勳（元大洋と巨人の捕手）、二宮忠士^{注30)}（元東映の内野手）の6名であった。

野球コーチ練習班として、各省、市、解放軍野球チームコーチ、業余体育学校^{注31)}野球コーチ、体育学院専業教師と中・高等学校体育教員合わせて40名が参加した。野球コーチ練習班は、日本コーチの北京、天津チームへの練習指導を観察し、北京で北京、天津、八一野球チームと愛知工業大学野球チームとの試合と合同練習を観察した。また、野球コーチ団は3試合の総括および理論を講述した。この他に愛知工業大学チームの副審判長渡辺恒夫を招いて第1回審判講習会を行った。野球コーチ練習班の中の審判員と北京市野球・ソフトボール協会審判班が、この活動に参加した。

この期間にまた、野球技術に関する映画と録画をみた。この今回のコーチ団は1976年に続き、再び中国に指導をしにきて、これらのレベルの高い元プロ野球選手は、世界の野球技術レベルを披露してくれ、大きな影響を与え、内容が豊富であり、中国野球の発展に大きく貢献した。

1980年6月、元ロッテのコーチの広岡達明^{注32)}（後に野球評論家）が、中国野球・ソフトボール協会^{注33)}主席の魏明^{注34)}に招待され、北京豊台野球場^{注35)}で1980年全国野球特別強化チームの試合を視察し、試合に参加している6つのチームのコーチに視察後に講評した。その中で中国野球の発展について話し、「日本やアメリカ野球の模倣をするのではなく、中国式の野球を作ることが中国に必要である」^{注36)}と意見を述べた。

1980年7月に、中国野球視察団が日中文化交流協会^{注37)}と毎日新聞社の招待を受け、日本を訪問し、代表団メンバーは何振梁、蔡季舟、張金龍、呉祿成、謝朝権、梁友徳の6名であった。何振梁等の3名は、なお、日本で行われた世界野球連盟^{注38)}会議に参加した。訪問期間の主要

な参観は、東京で行われた第26回世界アマチュア野球選手権大会^{注39)}であり、同時に日本野球界の親友に幅広く会った。プロ野球チーム、大学チーム、中・高校チーム、少年チームの野球の試合と練習を参観した。さらに、野球場と設備を参観した。

訪問と参観を通して、日本野球界の知名人と交わる機会を作り、交流は友情をもたらした。

日本の親友に対する日中友好発展と両国の野球界知名人の連携促進を図り、両国の野球組織の友好往来の強化は、中国野球発展のための熱い心に満ちた期待をもったの支援であった。日中が手を携えて協力することを示し、技術交流を強化し、派遣するコーチと審判を選出し、中国へ来て指導させ、中国野球チームが日本を訪問することを歓迎し、中国へ少年野球の道具を贈呈し、相互訪問を毎年進めてきて野球の交流活動はさらに発展した。

1980年8月に、巨人軍の元コーチの国松彰^{注40)}と中村稔^{注41)}が四川省の成都に招待され、四川野球チームと成都体育学院野球チームに野球指導をした。日本テレビの体育部社員の島田とカメラマンの福井が同行した。

1980年10月、横浜市野球コーチ一行4人が上海に招待され、上海野球チームに対して4日間の野球指導を行った。

1980年11月に社会人野球の本田技研野球チームが北京、成都、上海を訪問し、成都と上海で中国の野球チームと6試合し、成都では四川チーム、天津チーム、解放軍チーム、甘肅チームと対戦し、全て勝った。上海では、上海チーム、北京チームに勝った。本田技研チームは成都訪問期間に四川チームと合同練習を2回行い、各チームのコーチによる座談会を実施した。チーム顧問の山本英一郎^{注42)}は日本と国際アマチュア野球界で著名人であり、今回の試合を通して、彼は日中両方の良いところを取り入れ、足りないところを減らすことを希望し、お互いにレベルを向上させ、今後、中国が日本、アメリカを越える力を付けることを希望した。彼は「アマチュア野球チームの一連の踏襲を越えず、勤務時間以外の時間の必要性を高めることを考慮

し、基本技術の向上に努め、一步で天に登ることはできない」^{注43)}と言った。

1981年8月、社会人野球の日本石油野球チームが大連、天津の両地を訪問し、国家合宿練習チームと2試合し、勝利を得て、北京、上海、天津、甘肅、四川の各々のチームにも勝った。

同年10月、中国野球チーム一行25名が東日本へ渡り、友好訪問と親善試合をした。これは中国野球チームの最初の日本訪問であった。社会人野球の三菱重工チーム、日本生命チーム、全東海チーム、新日鉄チーム、本田技研チーム、日本石油チームと6試合行い、全て負けた。今回の訪問試合を通して、中国チームの打撃能力が弱く、守備は不安定でおよび国際試合経験が不足しており、これらの差が大きく、中国の野球の将来的発展のためには、さらに指導とレベルの程度を引き上げることが大変大きな課題であることを教え導かれた。また、今回の訪問は、日程が厳しく、試合会場も多く、移動時間も長かったが、中国チームは友好的な態度で臨んでおり、日本野球界の人々に大変好評であった。日本社会人野球協会^{注44)}の山本英一郎は「中国チームの試合態度は良く、必死に戦い、厳格に管理教育され組織の規律性も良い」^{注45)}と述べた。

この訪問を中国国家体育運動委員会は十分重視し、訪問前に優秀な者を採用し、優秀選手を集めて構成して特別に6ヵ月の合宿を実施し、同時に総任務を策定し、練習実施計画と冬の調査研究計画、チーム増強態度の形成、統一的指導体制の形成、練習の方向性と科学性を重視し、特別な練習が行われた。これらの計画の制定と実施は、中国の野球活動の理論と実践を融合し、レベルを向上させる一步となった。特に管理面でもまた、今後、国家チームの構成と練習を提供するための基盤となった。

1982年2月に、中国野球コーチ一行7人が招待されて日本を視察した。団長が唐風翔、通訳が譚顔平安、メンバーが天津チームの林徳望、上海チームの張璋、四川チームの杜克和、陝西チームの張孝軍、甘肅チームの馬尚金であった。宮崎市巨人軍冬季キャンプ場を訪れ、巨人軍の

総監督の藤田元司^{注46)}、助監督の王貞治^{注47)}の情熱的対応と指導を視察し、その上、彼らは野球上の理論と実践問題について討論し、得るところ多大であった。

1982年5月、全国人民代表大会常務委員会副委員長、中国野球・ソフトボール協会名誉会長の廖承志^{注48)}が北京において、日本社会の有名人である正力亨^{注49)}夫妻と随行員と会見した。正力亨は『読売新聞』社の社長であり、著名なプロ野球チームの巨人軍のオーナーである。彼は中国全国体育総会と中国野球協会に招待されて中国を訪問した。訪問期に国家体育運動委員会委員長の李夢華^{注50)}、北京市副市長の白介夫が客人として彼らに酒席を設けて接待した。

国家体育運動委員会副委員長と『体育報』社の社長の徐才^{注51)}が会見し、正力亨は『読売新聞』社の経営者は中国が体育を強化することを希望しており、多方面の交流を宣伝し、特に野球の交流をつくることである。昨日、我々と中国の友人と何度も対面し、大変打ち解けて懇切に談話をしました。東京読売新聞の巨人軍チームは、あなた方に連携して強化を助け、親善を増進することを望んでいる。中日双方向の交流の強化のために我々は働きかけに努力する。」^{注52)}と述べた。その後、中国野球・ソフトボール協会会長の魏明と一緒に中国の南方を訪問した。

1982年6月、プロ野球チーム巨人軍の元選手であった土井^{注53)}と関本^{注54)}の二人が北京野球チームの野球指導のために北京に招待され、同時にまた、コーチ練習班にも野球指導を行った。参加した練習班は、上海、北京、天津、陝西、甘肅、四川、沈陽、西安、北京師範大学体育学院、成都体育学院等のチーム内の野球コーチおよび野球教師20人であった。今回の練習班は、北京野球チームが受けた野球指導の下で参加学習し、その後、講評を受けた。

1982年6月、東北部地区の大学生野球チームで優勝した東北福祉大学野球チームが北京を訪問し、天津チームと北京チームと親善試合をし、北京野球チームが3対1で勝利した。これは日中の野球チームが1975年に開始した国際交流以来、訪問に来た外国野球チームに初めて中国

チームが勝ち、当日、北京ラジオがこの結果を放送し、『北京晩報』もまた、報道し、中国野球界の人々は興奮させられた。同年、7月に愛知大学リーグの愛知大学野球チームが訪問し、北京チームがまた3対2で勝利した。このことは中国野球技術レベルが一定に向上したことを反映した。同年8月、北京野球チームは、静岡県少林寺野球チームから招待され、日本へ友好訪問した。

1983年7月、中国野球チームは日本を訪問し、7戦試合をして全敗した。同年7月、有名なコーチである金田正一^{注55)}と日本の早稲田大学体育教授の阿部馨^{注56)}が大連に招待され、中国の集中調整合宿の青年野球選手を指導した。同年、8月に社会人野球の新日鉄野球チームが訪問し、北京から西安へ行き、北京、天津、四川、甘肅、陝西チームと5試合行い、全ての対戦で勝った。

1984年2月、第2次中国野球コーチ一行10人が招待され、宮崎市の巨人軍冬季キャンプ地を訪問した。団長は郭涌恩、通訳が林徳望、メンバーは、四川チームの徐明輝、上海チームの余仏基、甘肅チームの王永平、天津チームの王弟、選手の劉研軍、樓建平、焦益、王健であった。同年5月、野球コーチの山田潔、二宮忠士が甘肅蘭州に招待され、甘肅省野球チーム・ソフトボールチームを指導し、また、全省のコーチ練習班を同時にこの機会に指導した。同年6月、野球コーチの八尾が上海に招待され、上海野球チームに指導を行った。同年9月、熊本県にある熊本県熊本市の社会人野球チーム（にここ堂野球チーム）が北京と上海の両地を訪問して3試合を行い、熊本県熊本市野球チームが2勝1分けした。

1985年1月、日本ポニーベースボール協会^{注57)}理事長の伊藤慎介^{注58)}等が天津、北京、上海、蘇州を訪問し、中国野球協会の指導者と会見した。同年2月、第3次中国野球コーチ班が招待され、宮崎市の巨人軍冬季キャンプ地を訪問した。団長と通訳は、北京チームのコーチの顔平、安担任であり、コーチメンバーは、北京チームの魯学明、甘肅チームの楊国祥、四川

チームの劉宗禄、遼寧チームの李兆武、天津チームの那履同であった。訪問期間において王貞治等の17講課、すべて模範技術指導を受けた。国へ帰って資料集に整理し『中国野球科学的技術』に発表した。

1985年、北京野球チームの優秀投手の李兵が、にこにこ堂会社社長の林庫治（中国人）に招待され、4月から熊本県熊本市の社会人野球チーム（にこにこ堂野球チーム）で野球技術の学習をし、1986年10月に学習を終えて帰国した。

1985年4月、村岡久平^{注59}一家が来訪して接待をした。村岡久平は元日中文化交流協会常務理事事務局副局長であり、30年もの任期中、日中友好を積極的に推進するために働き、日中体育交流の促進と発展をさせるために多くの働きを行った。その後、野球雑誌社の顧問をし、野球雑誌社アジア出版社副社長を務め、中国野球の発展のために継続的に支持を続けた。同年5月、野球雑誌『ベースボール・マガジン』社の社長の池田恒雄を団長とする訪問団一行6人が北京を訪問した。同年6月、関西地区大学野球チーム一行25人が、第2回目の訪問をし、北京で北京チームに0勝6敗、上海で上海チームに4勝6敗であった。その後、1試合だけ軟式野球（当時、中国において未開発）の準硬式（TOP）ボールで試合を行い、日本チームが上海チームに16対0で勝った。同年大分県の高校野球チームが武漢を訪問し、武漢第12中学野球チームと親善試合をし、大分県の高校野球チームが勝った。同年、神奈川県川崎市の社会人野球チームが訪問し、遼寧阜新において、そこには野球チームがないため大連の第3中学生野球チームを迎えて親善交流試合を行った。

1985年、中国野球協会は、有名な野球コーチの篠原一豊^{注60}と池田善吾^{注61}を招待して秋、冬の両シーズンに分けて、北京と昆明の両地で彼らは優秀な野球選手を指導した。同時にコーチ練習班も指導した。昆明で篠原一豊は『体育報』の記者にインタビューされ、感慨と意見を述べ「私たち2人は中国へ来て、中国野球事業に対して希望を起こし、井戸を掘る働きをした。掘った井戸は深く使う水はあり、干からびるこ

とはない。しかし、我々は神仏ではなく、我々には学習が継続的に必要であり、向上させることを止めてはならない。我々の社長は我々の任務が中国野球レベルをできるだけ早く高めることを求めており、このために国へ帰ることを許されない。」^{注62}と述べた。篠原コーチは元日本国家チームのコーチであり、1985年1月に第13回アジア野球選手権大会^{注63}でチームを率いて優勝した。池田コーチはその時の投手コーチであった。彼らは明らかに高い文化的教養と理論水準を備え、また、中国野球事業の発展に熱心であった。今回、彼らは数年の累積の経験および豊富な実効的指導方法を備えており、言葉で伝え身体で教え、中国のコーチと選手は有意義な指導を多く受けることができた。

同年12月、四川、北京、天津、上海の野球チームの優秀投手の鄭厚強、李維杰、王振春、張東旭、樓建天の5人が、天津チームのコーチの林徳望が団長となり、社会人野球で日本一の横浜の日産自動車野球部で投手の技術を学習した。この事業の活動は、中国野球協会会長の魏明と副会長の蔡李舟および日本の元世界卓球優勝者の荻村伊智朗^{注64}が会談して進めた。荻村は彼の親友の佐波（元中日友好協会委員、当時、日本横浜ガス会社取締役社長）に委託し、この一つの任務を受け、佐波商会には野球場がなかったため、代わりに日産自動車野球部に委託した。育成任務の担当は、日産自動車野球部監督の田中^{注65}、投手コーチの村上、内野コーチの白鳥であった。中国の投手は一年学習し、1986年11月に帰国した。

同年12月、高校野球優勝チーム^{注66}が昆明を訪問し、昆明で国家野球チームと合同練習を行い、4試合親善試合を行い、中国チームは7対3、10対6で2試合に勝ち、その後、日本チームは10対5、7対6と2連勝した。

1986年5月、中国野球チームが日本を訪問し、大阪、名古屋、東京において、本田技研チーム、豊田チーム、三井銀行チーム、コンピューター企業（IBM）チーム等の社会人野球チームと親善試合を4試合行った。本田チームとの対戦は雨のため4回で終了し、その他の3試合は1勝

2敗であった。その中、中国野球チームは13対9で三井銀行チームに勝ち、これは中国チームが日本の企業チームとの対戦の中であげた記念すべき初勝利であった。

日本野球連盟副会長の山本英一郎は「あなたが三井銀行に勝利したことは、日本の野球史上にあって、中国チームの名前を書き留めた。中国野球チームが三井銀行企業チームに勝つことができたことは、中国野球のレベルがまた、向上した。」^{注67}と説明した。

同年、上海市野球チームは、日本へ訪問し、神戸、大阪、京都、八尾を親善訪問し、5試合親善試合をし、1勝4敗であった。

同年7月、高等学校野球連盟副会長の小松博等の一行が招待され、北京を訪問し、中国野球協会副会長の蔡季舟等と会談を行い、双方が今後の交流を続けて、協力していくことに意見の一致を得ることができた。また、国家体育運動委員会副主任の徐寅生^{注68}は7月、小松博会長一行と会見をした。

同年9月、アメリカのラスベガスのプロ球団であるドジャースのピーター・オマリー^{注69}オーナーが天津体育学院にドジャース球場^{注70}を建造寄贈し、落成式が行われた。北京人民大会堂の湖北レストランにおいて国家体育運動委員会主任の李夢華が宴会を行った。中国野球協会会長の魏明、天津体育学院院長の陳家奇等が出席し、アメリカからの出席者以外に日本からも東海大学学長の松前重義^{注71}、国際アマチュア野球連盟^{注72}副会長の山本英一郎、朝日新聞社の石井連蔵^{注73}、NHK テレビ野球評論家の星野仙一^{注74}、評論家の越智正典^{注75}等が参加した。ピーター・オマリーが天津体育学院野球場を寄贈に対しての事情を説明した。また、山本英一郎は「ドジャース球場は中国だけではなく世界の野球界にもまた、深く大きな意義がある。」^{注76}とお祝いの言葉を述べた。

同年10月、日本軟式野球連盟^{注77}の招待で中国野球協会の郭連剛、博徳厚、李友林の3人が、日本の第41回国民体育大会^{注78}の開会式と全日本軟式野球大会^{注79}の開会式に出席し、試合を見学し、日々座談会を行った。

同年、日本軟式野球連盟会長の藤井森男^{注80}夫妻、秘書長の五味博一^{注81}および顧問の村岡久平から成る日本軟式野球中国訪問団が、中国の野球協会の招待によって北京と上海の両地を訪問し、北京の期間は国家体育運動委員会主任の李夢華、副主任の袁仏民^{注82}と中日友好協会会長の孫平化^{注83}は相次いでこの代表団と会見した。双方の今後について、両国の軟式野球交流と協力の問題について友好的な会談を進めていくことに意見が一致し、交流協定書に署名し、1987年から中国の80～90の友好都市間の交流を引き起こして軟式野球運動の発展を決定した。

李夢華主任は、中国が好意的な日本の支援の下に次第に奮起してこの事業を推し進めて定着させるには、10年の時間を要するが、中国はこの事業を普及できることを明示した。このために国家体育運動委員会の下に『軟式野球の推進に関する情報通知』を発し、中国の軟式野球の推進活動と発展のために各省、市、自治区の市体育委員会、行政文化部、各行政業余体育協会、各体育学院の各所に計画を通達し、日本との全面的共同交流を推進し、日本自らの友好都市関係の部所および必要な条件をできるだけ早期に準備することをお願いした。これらは希望した通りに早急に作ることができ、同年齢のグループではない軟式野球チームが練習と試合を行うも、レベルが向上し、以来この事業の発展が続けられ、国際活動の必要性が十分に確認された。

同年12月、有名なコーチ篠原一豊と池田善吾が、第2回目の招待を受け、天津、厦門で青年野球合同練習チームを指導した。同年12月に高校野球優勝チーム^{注84}が招待され、福建省厦門を訪問し、国家青年合同チームと4試合親善試合をした。国家青年合同チームは1勝1敗であった。訪問チームは、遼寧青年チームと四川渡口青年チームとの両試合には大差で勝った。日本チームに同行した審判の中西明は同時に審判員の指導を実施し、厦門での審判員の冬期練習合宿に参加していた審判員が研修会に参加した。

1987年2月、第4回中国野球コーチ小班が招待され、宮崎市の巨人軍冬季キャンプ地を訪問

した。メンバーは、団長が劉学信、通訳が候樹棟、天津チームコーチの王銳、于春恒、甘肅チームコーチの馬保勇、上海チームコーチの産輝、陝西チームコーチの郭孔強であった。このキャンプ地での主な活動は、巨人軍の2軍練習への参加と視察および聴講であった。講義内容は、野球選手の人材選抜、敏捷性向上、体力作りと基本技術練習がテーマであった。

1982年以来、巨人軍冬季キャンプ地での学習に中国野球コーチと選手は4度出かけ、その都度情熱的な対応と辛抱強い指導を受け、多くの先進技術と優良な態度を学び、中国の野球コーチがチームを設立する推進力となり、また、中国と日本の両国の野球界における親友の理解と友好を促進させた。

同年2月、中国野球協会の副会長の蔡季舟と国際部長の孫柏青が日本へ招待され、日本の高校野球の第59回春の甲子園大会の試合を視察した。同年5月、社会人野球の東海電報電話（NTT）野球チームが招待され、北京と天津の両地を親善訪問し、北京チーム、国家合同練習チーム、天津チーム、四川チームと4試合を行い、全勝した。同年11月、高校野球優勝チームが、第3回目の中国への訪問をし、広州、廈門の両地を訪問した。中国青年野球合同練習チームと上海チームと廈門と広州の両地で各々対戦し、来訪チームが全勝した。

IV. 1972年の日中国交正常化から1980年代までの中国における野球活動^{注85)}

1. 全国大会の復活

1970年代前半、四人組^{注86)}が台頭し、中国人民は“文革”動乱の中に陥り、一方ではピンポン外交^{注87)}により、アメリカと日本の両国が相次いで中国と国交を樹立したことで、中国共産党と政府は体育に対する関心を引き起こした。このような歴史的背景下において、中国の野球はその他の体育種目と同様に次第に復活して発展するようになった。

1972年、過去の野球の発展が、比較的良かった上海、天津が一番早く復活し、野球チームを再結成した。

1974年、国家体育運動委員会は西安で全国10地区の野球・ソフトボール試合を行い、13年間中断した全国レベルの野球大会を復活させた。当時、『人民日報』、『体育報』と国内の多くの新聞が、このニュースを載せ、国内外で大変大きな影響を及ぼした。この大会に参加したのは、北京、上海、天津、沈陽、蘭州、西安、成都、武漢体育学院、北京体育学院の9チームであり、上海が優勝した。その中で第3位となった成都チームは、成都体育学院チームが主力選手であった。

これ以降、6ヶ所の体育学院の全てが野球・ソフトボールの教育課程を復活し、専門班を開設し、代表チームを成立させた。その中で沈陽、成都体育学院は、またチームを組んで直接全国大会に参加し、比較的良い成績を上げ、野球の発展と教師の育成に積極的な役割を果たした。

1975年9月、北京にて第3回全国運動会^{注88)}が行われ、野球は正式試合種目となった。全国運動会の野球に参加したチームは、北京、天津、上海、解放軍、甘肅、陝西、四川、河南、吉林、台湾、遼寧の11代表チームであり、天津チームが優勝した。

1976年7月、全国野球調整大会が北京で行われ、北京、八一、天津、上海、甘肅、沈陽の6チームが参加した。しかし、大会中に唐山で発生した大地震のために、この大会は完全に終了せずに中止した。

1977年9月、全国野球大会が大連で行われ、北京、天津、上海、八一、甘肅、陝西、河南、湖南、江蘇、四川、遼寧、福建の12チームが参加し、北京チームが栄冠を獲得した。

1978年、全国野球大会に参加したチームは、上海、天津、陝西、河南、四川、遼寧、台湾、北京、八一、甘肅、湖南、江蘇、福建、河北の14チームに増加し、全国大会の回復以来最多の参加チーム数となった。4つの地区大会の試合の他に1回の招待試合を増やしたことで、各チームの試合数と技術交流の機会が増加し、運動技術レベルの向上が促進された。この大会は、北京が優勝した。

1979年9月、第4回全国運動会^{注89)}が北京で

行われ、野球は正式種目として置かれ、北京、上海、甘肅、湖南、河南、福建、江蘇、解放軍、天津、四川、陝西、遼寧、台湾、貴州の14チームが参加し、北京が優勝した。

1974年から1979年の6年間は中国野球の復活の時期であった。その特徴は、大会へ参加するチーム数と試合数が年々増加し、国際交流を開始したことである。外国の先進技術を学びながら基礎の上に技術を積み上げて、技術を向上していった。1974年から全国野球大会が復活し、1979年までの6年間、全国野球大会は10回にも達し、1975年と1979年の両大会の全国運動会の正式試合種目となった。大会に参加したチーム数は、14となり、技術レベルもまた高く向上した。この期間、中国の出国視察員が派遣されたこと、派遣チームが出国して練習指導を受けたことが、顕著な効果を納めた。

同時に日本野球界から多くの派遣された専門家、コーチ団、優秀な野球チームが中国へ訪問し、練習指導をしてくれた。この国際交流によって中国の人々と日本人の親善の推進以外に、さらに、重要なのは日本の友人の手助けの下に、中国は野球を十分に復活させ、顕著な発展を得られたことであった。

1978年12月、共産党の第11回三中全会は、仕事の特別強化を社会主義現代化建設へと移転するという戦略を決定したことで、体育にも新しい発展の勢いが出現した。

1979年3月、中国野球・ソフトボール協会が成立した。同年11月には、中国は国際オリンピック委員会^{注90)}での合法的議席の復活を遂げた。また、1981年8月、国際アマチュア野球連盟への加入がなされ、中国の野球協会の指導者が、さらに、国際組織の中での職務を任された。

1980年代、野球が1983年の第5回全国運動会^{注91)}に正式種目とならず、一度停滞したにも関わらず、しかし、総体的にみると、中国の野球の発展推進は歴史上最高の時期に入った。全国大会の継続的発展、州対抗以上のレベルの大会に参加し、また、国際交流と技術協力が盛んに行われ、中国は国際野球連合やアジア野球連盟^{注92)}などの国際野球組織の中でも大きな役割

を果たした。これが中国野球の第二発展時期への進出を示し、中国野球は練習と競技のさらなる展開を推進した。

1979年、野球が第4回全国運動会の正式試合種目となったことに続いて、1980年代は練習と競技体制の改革を推進し、また、省・市の特別強化野球チーム、青年野球チーム、少年児童野球チーム、高校野球チーム、社会人野球チームにおける大会の漸次改善を促進し、毎年の大会の機会を大いに増加させ、技術レベルを向上させることを推進した。

2. 省・市の特別強化チームの復活と発展

1980年代、全国レベルの野球大会はさらに大きく発展した。1980年の全国野球リーグは、2リーグ制で試合を行った。第1リーグ戦の試合で上位6チームが特別強化チームとなる。順位は、甘肅、天津、上海、八一、北京、遼寧、成都体育学院、四川、湖南、陝西チームの10チームであった。この上位6チームが甲組となり、6位以下が乙組となる。第2リーグ戦の甲組の試合結果は、甘肅チームが1位となり、乙組では、八一2軍チームと北京青年チームが加わり、四川チームが1位となった。

1980年全国野球特別強化チームの試合は、6月に北京で行われた。目的は優秀野球チームのレベルを向上させるために試合数を増加させ、さらに、多くの練習の機会を設けることであり、天津チームが優勝した。

1981年全国野球リーグ戦に参加したのは、北京、上海、天津、成都体育学院、四川、甘肅、陝西の7チームであり、両リーグ戦とも北京チームが優勝した。

1981年、全国野球特別強化チームの大会は7月に大連で行われた。北京、上海、天津、甘肅、陝西、遼寧の6チームが参加し、北京が優勝した。全国大会に参加したチームが1979年に14チームもあったのに鑑み、現状6チームと極めて減少したことが、国家体育運動委員会と野球計画者の関心を引き起こし、その原因を分析すると、野球がオリンピック戦略から外れ、野球が1983年の第5回全国運動会の正式種目に入

らなかったためであった。このため中国の野球は、再度低迷し、省や市の一部の運動チームが解散されたが、なお、全国大会の中断が避けられたものの、いくつかの優秀野球チームだけが維持された。

そこで、国家体育運動委員会の競技二局が、第1回全国野球訓練業務会議を主催し、1974年の全国大会復活以来の経験教訓の真実の総括を行い、成績が上昇しているとの認識の一致がなされ、更なる発展を目標とすることが確認された。国際、国内の野球分野の発展形勢に鑑み、国家体育運動委員会は、第1次全国野球訓練業務会議通達を転送し、各級体育委員会に重要視させた。

そこで青年野球チームの大会を全国競技計画に加え、児童、少年野球への練習指導と大会を行うことに着手を始めた。

1982年、全国野球リーグの優秀チームは5チームだけであるが、喜ばしいことに、これらの特別強化の省・市が一流チームを保留しただけではなく、児童や少年の下位クラスの指導を強化した。この1年は、大会が、2リーグ戦に分けられ、成年組と青年組に分けて各々行った。特別強化野球チームの大会は、2つのリーグ戦の間に行われた。第1リーグ戦は、4月に西安で行われた。成年組是北京、上海、天津、甘肅、四川の5チームであり、1位は上海となり、青年組は天津、甘肅、四川、遼寧、陝西の5チームで、1位は陝西であった。

第2リーグ戦は、10月に渡口で行われた。成年組は上海が1位、青年組は遼寧が1位となった。

1982年、全国特別強化野球チームの大会は、6月に蘭州で行われ、参加したチームは、甘肅、四川、天津、北京、上海、成都体育学院の6チームであり、天津チームが1位であった。

1983年、第5回全国運動会が行われ、今回の全国運動会には野球種目はなかった。同時にこの年の全国野球リーグは年間試合が3リーグに分けて行われた。その目的は、各チームの試合機会の増加であり、青年チームの選手に、さらに多くの鍛錬の機会をもたせることにあった。

試合に参加する甲（成年）、乙（青年）組はみな、2回戦総当たり試合を実施し、年間3リーグ戦の累計点数に応じて順位を決めた。

第1リーグ戦は、5月に天津で行われ。甲組是北京、上海、天津、四川、甘肅の5チームであった。国家野球合同練習チームが参加したので甲組の各チームの選手が引き抜かれて国家チームへ組み入れられたために、この第1リーグ戦は順位をつけなかった。また、乙組是北京、四川、陝西、遼寧、沈陽体育学院の5チームが参加し、陝西が1位となった。

第2リーグ戦は6月に大連で行われた。甲組は上海チームが1位であり、乙組は遼寧が1位であった。

第3リーグ戦は10月に重慶にて行われた。甲組は上海が1位であり、乙組は陝西が1位であった。1年間の3リーグ戦の各チーム総累計は、甲組は天津が優勝、乙組は遼寧が優勝した。

1983年から正式記録の実行と優秀選手の表彰を行った。年間選出結果、甲組優秀投手は高貴庭（天津）、邢宝常（天津）、桜建夫（上海）。優秀打撃選手は王躍（天津）、宗崇鈞（上海）、董建平（甘肅）、李兵（北京）、馮立（上海）、盧学明（北京）、黄慶宇（北京）、徐大勇（四川）。乙組の優秀投手：季濱（遼寧）、尹宝良（遼寧）、優秀打撃選手は鄒張文（遼寧）、陳継勇（遼寧）、姜雁民（陝西）であった。

1984年全国野球リーグは年間2リーグ戦で行われ、これまでの甲と乙組は、1つに合併して国家体育運動委員会が審査して決めた1983年野球競技規則を採用した。この競技規則の特徴は、青年チームと成年チームが一緒に試合ができることであり、青年選手の技術レベルを向上させるのに有効となった。

第1リーグ戦は4月に陝西漢中で行われた。北京、天津、四川、甘肅、上海、遼寧、北京、陝西青年チームの8チームであった。第2リーグ戦は、10月に福建永安で8チームが参加した。甲組是北京が1位、乙組は遼寧が1位であった。

1984年リーグ戦の2リーグ戦の間に選手権大会を一回増やした。全国野球選手権大会は7月に北京で行われ、8チームと新たに沈陽体育学

院が参加した。1位は北京であった。1984年の優秀投手は、甲組は刑宝常（天津）、楼建夫（上海）、劉則剛（甘肅）、韓德義（甘肅）、蔣鳳鳴（上海）、乙組は尹宝良（遼寧）。優秀打者は、甲組は于延昌（北京）、黄国傑（甘肅）、王大海（天津）、徐大勇（四川）、王興（甘肅）、張先華（四川）、蔣鳳鳴（上海）、熊小波（四川）、乙組は張波、王国強、張海濤であった。

1985年全国野球リーグは、青年チームのレベルが絶え間なく向上したことから、参加チームが多くないため、組分けせずに行った。第1リーグ戦の試合は、4月に四川渡口で上海、四川、北京、天津、陝西、遼寧、甘肅、渡口の8チームが参加して行った。第2リーグ戦は、10月に大連で行われた。1位は四川であった。

1985年、全国野球選手権大会が蘭州で行なわれ、四川、上海、北京、天津、甘肅、陝西、天津青年チームの7チームが参加して、1位は四川チームであった。1985年の優秀投手は、鄭厚強（四川）、楼建夫（上海）、蔣鳳鳴（上海）、李維傑（北京）、焦益（天津）であり、優秀打者は、于延昌（北京）、涂明輝（四川）、熊小波（四川）、焦益（天津）、楼建夫（上海）、孫傑（上海）、姜雁民（陝西）、盧勝（上海）、徐大勇（四川）、高振華（甘肅）であった。

1986年全国野球リーグ戦は、4月に陝西漢中で北京、天津、上海、遼寧、四川、甘肅、陝西の7チームが参加して行われた。第2リーグ戦は10月に四川渡口で行われ、四川が1位であった。

1986年、全国野球選手権大会が7月に長春で行われ、天津、上海、四川、北京、陝西、遼寧、甘肅の7チームが参加して行われ、天津チームが1位であった。1986年の優秀投手は、劉研軍（四川）、蔣鳳鳴（上海）、謝敏（四川）、韓德義（甘肅）、刑宝常（天津）であり、優秀打者は王大海（天津）、徐大勇（四川）、宋榮鈞（上海）、焦益（天津）、陳繼勇（遼寧）、黄慶宇（北京）、張金生（天津）、蔡虹（四川）であった。

1986年12月、国家体育運動委員会訓練競技二局は、厦門にて第2回全国野球訓練業務会議を開催し、中国少年児童野球が国際交流中に上

げた優秀な成績と経験を重視し、特別強化を行なって青年野球へ導入し、そして、成年野球へ育成努力する方向を明確化した。野球技術を向上させるために、1つ目は国外の先進経験と技術を積極的に導入して学びながら新しい考えを出し、在学中に野球レベルの向上を進展させて育成することである。2つ目は、児童から始めて児童からの少年、青年、成年への一本化の訓練体制を確立することである。3つ目は、管理を強めて改革を深化させて中国野球を世界先進レベルへ急速に追いつかせることである。今回の訓練業務会議は、中国野球の推進方向を一つの新しい発展段階へと推し進めた。

1987年、中国の第6回全国運動会^{注93)}が行われ、野球は正式種目となり、全国運動会の野球大会に集中的パワーを傾注するために本年度の全国リーグ戦を行わないことを決定し、別に全国選手権大会だけを行った。1987年2月、国家体育運動委員会は『第6回全国運動会野球試合規定の通知に関する下達』を通達し、その文中に競技日程、場所、参加単位、参加方法、競技方法、順位と表彰の方法、審判員等の配置要求の詳細な規程を作った。同時に国家体育運動委員会は、『選定活動の方法と要求に関する全国体育競技、競技会別発展のための精神文明奨励』を發布した。また、『選手規則』、『コーチ規則』、『審判員規則』を制定してこれらに従わせた。

第6回全国運動会野球大会は、4月に大連で行われ、北京、天津、上海、四川、陝西、甘肅、福健、遼寧の8チームが参加した。国家体育運動委員会訓意二司長の陳家亮、中国野球協会主席の魏明曾が臨場観覧し、中央電子台の宋世雄が現場解説し、野球特別編集の記録が中央台で連続放送され、これは中国で初めてであった。各チームの中に記者、カメラマン、監督を包括してブレントラストを組織化し、競技前に、各チームは陣容を整えて試合に臨んだ。

第1リーグ戦は北京チームが第1位であった。第2リーグ戦は四川チームが1位となり、総合で四川チームが優勝した。この全国運動会野球大会における一つの主要な特徴は、控え投手の能力が全体的に向上しており、投手を選出

派遣して留学に出国させることは、効果的な措置であることが立証された。

1987年全国野球選手権大会は9月に長春で行われた。北京、天津、四川、遼寧、天津体育学院、上海、甘肅の7チームが参加し、北京が優勝した。1987年の年間（第6回全国運動会）で優秀投手は李維杰（北京）、鄭厚強（四川）、東旭（天津）、優秀打撃選手は于延昌（北京）、鄭厚強（四川）、魯国王（遼寧）、大貫克英（天津体育学院、日本人留学生）、張宝林（天津）であった。

1988年、全国野球リーグ戦は、第1リーグ戦は5月に陝西漢中で行われ、北京、天津、四川、遼寧、天津体育学院、甘肅、上海の7チームが参加し、天津が1位となった。第2リーグ戦は11月に福建廈門市で行われ天津チームが1位となり、総合成績で天津チームが優勝した。

1988年全国野球リーグの優秀投手選手は、天津チームの李家強、遼寧チームの郭景林と尹宝良であり、優秀打撃選手は、天津チームの陳文兄、張金生、四川チームの徐大勇、刘江、遼寧チームの陳継勇であった。

1988年全国野球特別強化チームの調整大会は7月に天津体育学院で行われ、天津体育学院、北京、四川、上海、天津の5チームが参加した。第1リーグ戦は天津体育学院が1位となり、第2リーグ戦でも天津体育学院が1位となり、総合で天津体育学院が優勝した。

1989年全国野球リーグ戦が行われた。第1リーグ戦は4月に陝西で行われ、天津、北京、上海、四川、北京体育師範学院、甘肅の7チームが参加し、天津が1位になった。第2リーグ戦は、11月に成都で行われ、天津、四川、北京、大連、天津体育学院、上海、蘭州、北京体育師範学院の8チームが参加し、天津が1位となった。総合成績では天津チームが優勝した。この2つのリーグ戦の間に全国野球希望杯の大会が行われた。この青年組による全国野球希望杯リーグ戦大会は6月に長春市で行われ、大連、上海、天津二軍、天津体育学院、北京体育師範学院、天津西郊の6チームが参加し、大連が優勝した。

3. 高校野球の復活と発展

北京の高校野球活動は1970年代に発展した。1972年の日中国交正常化により、北京のいくつかの高校は絶え間なく日本からの留学生を招集し、北京の高校野球実施校を増加させた。北京高校競技委員会主催の毎年一回の高校野球選手権大会が、北京外国語学院、政法学院、語言学院、財貿学院、北京大学、北方工业大学等の高校が参加し、日本人留学生が参加した北京語言学院野球チームが優勝した。1980年代に入って北京市野球協会と親善野球クラブが主催で毎年一度の親善杯野球大会へ高校チーム、社会人チーム、青年チームから10チームが参加した。一方、上海では、1980年代に入って上海第一医学院、華東化工学院、上海体育学院等の学院野球チームが一年に一度みんな参加した全市野球大会があった。この他、大連工学院、大連医学院、大連財經学院、大連水産学院、沈陽東北工学院、広州体育学院、天津南開大学等は、また、相次いで野球を発展させた。

1983年に国家体育運動委員会の支持を得て大連工学院にて、第1回全国高校野球招待大会を組み、9都市の11ヵ所の普通高校と2つの体育学院、計13の野球チームが参加して試合をした。天津南開大学が優勝し、広州体育学院が2位となった。

1984年から全国高校野球大会は国家体育運動委員会の競技計画に入り、毎年大会が行なわれた。第2回全国高校野球招待大会が1984年大連で開幕し、大連工学院が主管となって行った。参加したチームは、天津南開大学、北京政法学院、上海第一医学院、広州体育学院、大連海運学院、東北工学院、遼寧財經学院、大連医学院の8チームであった。天津南開大学が優勝、広州体育学院が2位であった。

第3回全国高校野球招待大会は、1985年上海で行われた。上海華東化工学院が主管となって北京冶金机电学院、大連医学院、上海第一医学院、東北工学院、上海華東化工学院の5チームが参加し、上海華東化工学院が優勝した。

第4回全国高校野球招待大会は、1986年北京で行われた。北京北方工業大学が主管となった。

大連医学院、上海華東化工学院、東北工学院、北京財經学院、北方工業大学の5チームが参加して大連医学院チームが優勝した。

第5回全国高校野球招待大会は、全国高校野球選手権大会と名称を改めて、1987年東北工学院が主管となって沈陽で行われ、上海華東化工学院、上海医科大（元上海第一学院）、大連工学院、天津南開大学、東北工学院の5チームが参加し、東北工学院が優勝した。

第6回全国高校野球選手権大会が、1988年上海で行われ、上海医学大学、東北工学院、大連医学院、南開大学、上海華東化工学院、武漢体育学院の6チームが参加し、上海華東化工学院が優勝した。

第7回全国高校野球選手権大会と第1回体育学院校野球選手権大会が、1989年8月に北京で行われた。上海華東化工学院、北方交通大学、財貿学院、天津体育学院、北京体育師範学院、北京体育師範学院二軍、福健体育学院、武漢体育学院と広州体育学院、福州第二化工の10チームの160名の選手が参加した。普通高校と体育学院の成績は区別され、普通高校では上海華東化工学院が優勝し、体育学院では天津体育学院が優勝した。

この頃、国家教育委員会^{注94)}自らが全国51カ所の高等院校に高レベル運動チームを創設することを認可し、これは高校野球を広めることとなった。中国野球協会は、天津体育学院を1986年から中国野球の第一推進校とし、各年齢で組織された児童、少年、青年の三つの野球チームで一貫指導を行い、試合成績が突出した。青年チームでは1989年に全国体育学院大会で優勝し、その上、天津チームが一緒となって参加したモスクワで行われた4カ国招待試合において好成績を取得した。1988年天津体育学院少年チームは、日本の千葉県大会でもまた特に優れた成績を上げた。1989年天津体育学院の2名が主力選手となった中国少年野球チームは世界第3位となり、その中の高利軍は最優秀左投手となった。また、天津体育学院児童野球チームは、1988年全国冬期訓練大会中に2位となった。

1987年北京体育師範学院は、少年野球チー

ムを創設し、そのチームの選手は北京市少年児童野球チームの中の優秀選手と一部外地の優秀な少年野球チームの選手であり、1989年からこのチームが中国少年野球チームの主な構成となり、国際野球連盟主催の最高水準の第1回AA級世界少年野球選手権大会^{注95)}に参加し、ブラジル、カナダ、アメリカ、ベネズエラ共和国、南朝鮮チームに連勝し、3位を獲得した。同年、第1回体育学院野球選手権大会で天津体育学院は体育学院で1位になった。このように体育学院が野球チームとして全国大会に参加することは十分に重要な意義を持っていた。

1970年代中頃から体育学院野球チームは自身もまた鍛錬を遂げて優秀チームとしてレベルが高くなり、直接全国体大会に参加できるように発展した。体育学院野球チームは若干の優秀な青少年の入学を募集することができ、比較的良い条件の下に野球を経験し、国家養成専門人材となり、小・中学校の学校の教育者となって野球コーチとなり、指導者としても中国野球の発展に活躍してきた。

4. 社会人野球の誕生と発展

1982年、中国が建国後初めて労働者の野球組織である北京外国語学院の親善野球クラブを設立した。このクラブの主旨は健康増進と活発な生活のための労働者野球活動の発展の推進であり、1983年に始まり、北京市野球協会連合が主催して北京市親善杯野球大会が行われた。優勝の座を守るチームはなく、毎年1位が変わった。毎回、高校、中学、役所、業余体育学院の8つの労働者チームが参加し、広範囲な人々が参加した。また、このクラブに日本の早稲田大学労働者野球チームとアメリカのロサンゼルス中高労働者野球チームが訪問して対戦した。

1985年、中国で初めて唯一の工場経営労働者野球チームの北京クレーン工場労働者野球チームが誕生した。この工場チームは日本の多田野株式会社が作り、同時にまた、北京市体育委員会、北京市体育分会、北京市総工会、北京市野球協会の支持が得られた。このチームは1986年北京親善杯大会と全国青年野球優勝大会への

招きに応じ、並びに1987年に北起杯全国青年労働者野球大会に参加した。

1980年代に入って、広州黄埔港事務局は、日本とアメリカの船員を広州市の野球大会に参加させるために一つの労働者野球チームを作った。この野球大会への参加は、生産勤務や生活活動にも良好な作用を発揮して労働者を良い方向へ導いた。

一方、上海静安区住宅建築工程会社労働者野球チームは一つの企業野球チームであり、業務以外で野球の練習を行い、1986年に上海市野球大会に参加した。この他に福州二化、福州商儲、濟南製鋼所、齊齊哈爾濱機械工場、中国第二汽車製造工場などの労働者野球チームがまた相継いでできた。このように労働者の野球が行われる基礎ができあがり、全国的な労働者野球大会の開催が準備されていった。

関係各所の協議を行い民営の社会賛助が得られ、全国労働組合総連合会が主催し、北京市野球協会と北京工業大学連合は、1987年に第1回全国労働者野球招待大会を行った。福州二化チーム、黄埔港チーム、北京クレーン工場チーム、上海静安区住宅建築工程会社チーム、北京第二汽車修理工場チームの5チームが参加し、別に北京、天津、渡口から順位決定に入れない3チームが参加した。

第2回全国労働者野球招待大会は、1988年北京で行われ、齊齊哈爾濱市和平機械工場、福州二化学工場、上海建築防水材料会社、広州港事務局、北京第二汽車修理工場、中国第二汽車製造工場のチームの6チームが参加し、中国第二汽車製造工場が優勝した。

第3回全国労働者野球招待大会は、1989年10月に福州で行われた。中国第二汽車製造工場、広州港事務局、厦門国際飛行場、福州二化学工場の4チームであり、中国第二汽車製造工場が優勝した。

1987年以来、3回の全国労働者野球大会がすでに行われ、中国の労働者野球は発展を得られたが、しかし、国家は大会のために少量の補助金しか出さなかった。1989年は福州二化学工場が全国労働者野球大会を主管したが、国家は一

銭も補助金を出さなかった。社会が競争して野球チーム支援がすでに出現しており、四川、北京、天津、大連の野球チーム、国家野球チーム、国家少年野球チームは社会的経済的支援が全て得られており、その他に支援金は、全国大会や海外大会への参加に使われており、中国の野球事業の発展を推進した。

この中で広州市は港を利用する広州の二つの企業家と社会友好界の支援が十分であり、広州市野球基金会在が成立し、それによって広州野球活動はさらに素早く発展した。このような支援は、中国野球活動を盛んに変化させる一つの重要な要因であった。

中国野球の社会化は、社会の支持と参加を成し遂げ、すなわち野球事業を創立して経営を発展させる能力をも掘り起こした。一つの企業が二化人精神をもって福州二化の歴史は国際野球招待大会をも誕生させ、日本航空会社チーム、台北屏東チーム、フィリピンチーム、朝鮮平壤チームが招待されて参加した。台北とフィリピンチームはいろいろと不便なため参戦できなかったが、しかし、二化杯国際社会人野球招待大会は、1989年10月に福州市にて行われ、朝鮮平壤社会人チームが優勝した。一つの企業が国際野球大会を行ったのは中国にて最初であった。

福州二化は4千社あるうちの一つの企業であり、しかし、彼らの開拓進出は創新な二化人精神であり、困難を恐れずに受け入れ、年間数億元を超える生産量の企業と業績を残した。また、社会人が愛好する野球チームを末端組織に受け入れ設立し、この野球チームは、団結力のある社会人であり、企業精神を奮い立たせるのに重要な作用を発揮した。この二化の社会人精神を発揚した国際社会人野球招待大会は中国野球活動へ大きな貢献をした。

5. アジア大会と世界青年選手権大会への参加

1981年の国際アマチュア野球連合会に中国が参加した後、続いて1984年10月に中国はまた、アジア野球連盟の合法的地位を獲得し、中国野球・ソフトボール協会主席の魏明は連続3回ア

アジア野球連盟の副主席に選ばれ、秘書長の唐風翔はアジア野球連盟の青年委員会委員に選ばれた。1985年から2年毎に実施されるアジア野球選手権大会に中国チームは参加し、成績は第1回と比べて少しずつアジアの3強である日本、南朝鮮、台湾との差が縮んでいった。

チームが最初に派遣されたのは第13回アジア野球選手権大会である。1985年1月にオーストラリアのパスで本大会が開催された。参加したのは中国、中国台北、日本、南朝鮮とオーストラリアの5カ国の野球代表チームである。これが中国最初のアジア野球選手権大会への参加である。中国野球代表団のメンバーは、団長が蔡季舟、監督は唐風翔、ヘッドコーチは曹岳鐘、コーチは宗平山（兼選手）、余仏基（兼選手）、調査研究員が夏徳立、選手は宋平山、王金澤、于延昌、王振看、邢宝常、李兵、蔣風鳴、鄭厚強、徐大勇、王大海、黄国杰、宗榮鈞、熊小波、王躍、黄慶宇、焦益、李維杰であった。

試合結果は、日本チームが第1位、中国台北チームと南朝鮮チームが並んで2位、オーストラリアチームが4位、中国チームが5位であった。中国チームの8試合の成績は全敗であり、中国チームのレベルが上位4つのチームと大変大きな差があることが明らかとなった。

今回の大会を通じて、多くの問題が暴露され、他国との差が大きく、なお、深刻であり、中国の野球界人に衝撃を引き起こさずにはいられなかった。その遅れを取った姿と差を縮めるために変革を行い、中国野球協会は1986年、第2回全国野球訓練業務会議において、中国の野球の発展的方策と方針を確定し、近い将来にアジア選手権において、グアム島チームを負かして第4位を獲得するための奮闘目標を設定した。その会議は全国野球コーチと大きな志を有する選手達に中国野球事業の発展に貢献をするための強い責任感を持たせて奮起させた。

第14回アジア野球選手権大会^{注96)}が1987年8月に日本の東京で実施された。参加チームは日本、中国、中国台北、南朝鮮、オーストラリア、グアム島、インドの7カ国であった。試合結果は、中国台北チームが5勝1敗で優勝を獲得し、

2位から7位は、日本、南朝鮮、オーストラリア、グアム島、中国、インドであった。

今回の選手権大会に参加するには、アジア野球選手権に参加する経験と基礎的な教訓において、国家野球チームが北京、昆明、天津、廈門の4つの訓練所で8ヵ月練習をしてから大会に臨んだ。練習期間において、日本代表チームコーチの篠原一豊と池田善吾が主に技術・戦術と身体的全面的練習指導をするのに招かれた。以前から1985年12月に北京、天津、上海、四川の5名の優秀な投手が日本に一年間留学派遣されていた。派遣先での練習は、アジア野球選手権大会の準備を日本で行うためであった。同時に全日本の高校の野球優勝チームに来てもらい2回試合をした。

アジア選手権前の練習期間が比較的長く実施できたことにより、アジア選手権大会中にチーム全体が一致団結し、必死に頑張り頑強となり、個人のレベルを向上させた。日本野球界の人々とアジア野球連盟の役員、各代表チームの評価は、中国チームの攻防技術レベルは、前回に比較して大きく進歩して高くなり、各先進チームとの距離が縮小された。しかし、中国のチームにはそれでもなお多くの問題があり、投手が少なく、抑え投手がさらに少なく、守備の技術が低くて送球技術差があり、攻撃意識性の能力不足や打撃技術が不安定であり、機敏能力不足と国際試合の経験不足などが明らかであった。

第15回アジア野球選手権大会^{注97)}の中国チームには、この大会の実践を通してアジア3強との差を縮小することが課せられた。1989年9月、南朝鮮の漢城でこの大会が行われ、中国台北、中国、日本、グアム島、フィリピン、インド、南朝鮮の7カ国が大会に参加した。試合結果は、中国台北と日本、南朝鮮が1位に並び、中国チームは4位、5～7位はそれぞれ、グアム等、フィリピン、インドであった。

中国チームの戦略は、グアム島チームを打ち破り、フィリピンチームに苦戦するも3強との差を少しでも縮めることであった。この目標は容易に達成できなかった。中国チームの総合実力と各選手の平均的技能はアジアの強いチーム

と比べて劣っており、すべての攻守技術、戦術意識、試合経験、現場指揮の面では投手の球速と始まりから終了までの球速を維持する完投能力、低い打撃力と変化球に対応する能力、守備の送球力、フットワーク、中継刺殺等の能力は、強いチームとの間に大きな差が存在した。しかし、中国チームはグアムチームとフィリピンチームには、少し優勢となったことからこの成績は第2回全国野球訓練業務会議の狙いが間違いなかったことを確信させ、中国の野球発展の戦略方針は正しかったことを証明した。

1988年12月に中国青年野球チームが、オーストラリアで開催された世界青年野球選手権大会へ参加した。この大会は大変レベルが高く、争奪が強烈な世界青年野球大会であり、キューバ、アメリカ、カナダ、中国台北、南朝鮮、オーストラリア、中国、イタリアの8カ国が参加した。中国は全敗し、第8位であった。

今回の世界青年野球大会を通して、国家チームの合宿練習にすべての検証がなされ、レベル差を縮めるための方向性がみえた。各国チームとの差は多方面であり、主な差は練習上にあり、とりわけ基本技術と連係される実戦の練習上にあり、投手は投球数と能力が不足であった。また、打撃技術はすべて悪く、守備のフットワークは緩慢であり、特別な素質の突出もない。さらに、攻防戦術と指導系統も良くないし、集団実践能力不足がみられ、世界大会の経験不足が明らかであったことから国家野球チームの練習経験の提供を追求する必要性が認識された。

V. 考察

1. 日中戦争終了の1945年から1960年までと1972年から1989年までの中国における各々の野球活動状況の比較。

1) 日中戦争終了の1945年から1960年までの野球活動

中国では、日中戦争が終了した1945年以降、1947年から野球が復活し、その後、1960年までの14年間において野球は発展した。復活したその一つは、軍隊による野球であった。軍隊では野球を軍事訓練の一つとして取り上げ、盛んに

奨励し、中国の軍隊が置かれていた各地で広まった。また、各地の部隊で軍運動会が開催されて野球大会が行われていた。さらに、1952年に中華人民解放軍第1回全軍運動会が北京で開催され、野球種目も8つの各地からの代表チームが参加して行われる程に発展した。

しかし、1955年からは軍の縮小再編のために各地部隊の野球の活動は低下したが、1959年には第2回全軍運動会が開催され、野球にはまだ14チームが参加しており、野球が引き続き行われていた。また、同年に開催された第1回全国運動会には、北京軍区隊を主とする解放軍野球チームが参加し、全国第2位となる好成績をあげた。建国後、中国人民解放軍は戦争時代に野球活動を培った伝統を継承し、1952年の全軍運動会にて全国規模の野球大会を中国国内で最初に行い、野球活動の発展を推進した。しかし、1961年から国内の試合がなくなったため野球の活動を中断した。

軍以外の一般人における中国の野球は、1947年に台湾の石炭野球チームが上海に訪問し、復旦大学野球チームと熊貓野球チームと試合を行ったのが、日中戦争後の野球復活の始まりであり、その後、1952年に天津で中学生からなる北斗星野球チームが設立され、天津地区での野球が復活し、発展していくこととなる。1956年に国家体育運動委員会が野球を推進したことによって、各地で野球が復活し、全国野球公開競技会が行われ、毎年、全国的な野球大会を行った。特に北京の高校においては、次々と12校における野球の復活が起こり、毎年高校の大会を行い、また、全国8地区野球選手権大会が開催された。さらに、1959年には全国運動会に野球種目が正式に採用され、全国から23チームが参加して大会が行われた。また、1960年には全国野球対抗戦が24の省・市・解放軍チームが参加して行われた。

しかし、1961年～1971年の11年間に渡って中国は経済的な貧困状況と文化大革命によって野球の活動は中止しなければならなかった。

2) 1972年の日中国交正常化から1989年までの野球活動

1972年に日中国交正常化がなされ、1980年代末までの18年間に中国の野球の活動は復活し発展を遂げた。その発展の過程の一つには、全国大会の復活があった。1972年には、過去に野球が全国的にみても比較的良く発展していた上海と天津が最も早くに野球活動を復活させて野球チームを結成した。その後、徐々に各地で復活が起こり、国家体育運動委員会は、1974年に全国10地区の野球・ソフトボール大会を行い、これまで13年間中断した全国大会を復活させた。また、6カ所の体育学院で野球・ソフトボール教科課程を復活して専門班を設立して代表野球チームを作った。

1975年に第3回全国運動会が行われ、野球が正式種目となり、11チームが参加し、1976年から1978年までの毎年に全国野球大会が開催され、参加チーム数は14チームとなり、全国大会復活以来過去最多の参加チーム数となった。また、1979年の第4回全国運動会でも野球は正式種目となり、14の省・市、解放軍チームが参加した。しかし、中国では野球がオリンピック戦略から外れたため、1983年の第5回全国運動会では野球は正式種目から外れ、1987年の第6回大会では野球は復活するが、参加チーム数はたった8チームだけであった。

その後、1980年から1989年まで全国野球リーグ戦大会が行われ、1982年から全国特別強化野球チーム大会が、1984年から全国野球選手権大会が毎年行われたが、しかし、1989年までの各大会における参加チーム数は10チーム以下であった。

これらの全国大会の復活と野球活動の推進には、国家体育運動委員会の野球への政策があった。1974年の国家体育運動委員会の全国野球大会の開催への働きかけによって全国大会が復活した。1979年には中国野球・ソフトボール協会が設立される。国家体育運動委員会は国際オリンピック委員会での議席の復活を成し遂げた。1981年には中国が国際アマチュア連合会への加入が認められ、中国野球・ソフトボール協会の

指導者が国際組織で職務を担当した。

1983年に国家体育運動委員会の支持の下に第1回全国高校野球招待大会を開催した。この大会には、11の普通高校と2つの体育学院が参加して行われた。その後、毎年開催されるものの、しかし、1984年には、8チーム、1985年、1986年、1987年にはそれぞれ5チーム、1988年には6チームが参加するに留まった。1989年には第7回全国高校野球選手権大会と第1回体育学院野球選手権大会が行われたが、前者には普通高校が4校、後者には体育学院が6校の参加しかなかった。

1984年には中国野球・ソフトボール協会主席の魏明がアジア野球連盟の副主席に選ばれ、秘書長の唐風翔がアジア野球連盟の青年委員会委員となった。中国野球協会は、1986年に天津体育学院を野球の第一推進校とし、児童、少年、青年の一貫指導を始めた。また、翌年には国家体育運動委員会は、第2回全国野球訓練業務会議を開催し、児童・少年からの一貫した育成訓練体制を健全した。

その成果は、1988年天津体育学院少年チームが遠征した日本の千葉県大会で優れた成績を上げ、また、天津体育学院児童チームが全国冬期訓練大会で2位となる効果が出た。しかし、同年に開催された世界青年野球選手権大会では8カ国が参加し、中国は全敗し、第8位であり、世界とは大きな差があることを実感した。1989年には、天津体育学院青年チームのメンバーが天津チームに入り、モスクワで行われた4カ国招待試合において好成績をあげる。また、天津体育学院の2名の少年が主力となって参加した世界大会で3位となった。さらに、北京体育師範学院少年野球チームが第1回AA級世界少年野球選手権大会で3位となる成果がみられた。

さらに、社会人野球の誕生と発展が起こった。中国で初めて労働者の野球組織が誕生したのは、1982年に北京外国語学院の親善野球クラブであった。翌年には、北京市親善杯野球大会が北京市野球協会連合の主催で労働者8チームが参加して行われた。また、同年、親善野球クラブ

は日本から訪問した早稲田大学労働者野球チームとまた、アメリカから訪問したロサンゼルス中高労働者野球チームと親善試合を行った。

1985年には、中国で初めて工場経営労働者野球チームの北京クレーン工場労働者野球チームが誕生した。翌年、北京クレーン工場労働者野球チームが北京市親善杯野球大会と全国青年野球優勝大会へ招かれて出場した。

一方、1986年に上海では上海静安区住宅建築工程会社労働者野球チームができて上海市野球大会に参加した。また、上海では、福州二化、福州商儲、済南製鋼所、齊齊哈爾浜機械工場、中国第二汽車製造工場などの労働者野球チームができた。

1987年には第1回全国労働者野球招待大会を5チームが参加し、別に北京、天津、渡口から労働者と異なる3チームが参加して行った。その後、毎年行われ、1988年には6チームが、1989年には4チームが参加して行った。

一方、国際大会への参加進出により、中国の野球レベルが他国と比べてあまりにも低いことを痛感したため中国野球のレベル向上策作成に着手した。1985年に第13回アジア野球選手権大会では、参加した5ヶ国中、中国は全敗して最下位となった。このため翌年に、中国野球協会は第2回全国野球訓練業務会議において、野球の発展的方策と方針を確定し、近い将来にアジア選手権において、グアム島チームを負かして第4位を獲得するための奮闘目標を設定した。

1987年の第14回アジア野球選手権大会では、7ヶ国中、中国は6位であった。翌年の世界青年野球選手権大会では大変レベルの高い8ヶ国が参加し、中国は全敗し、最下位であり、中国はさらなる強化の必要性を痛感した。しかし、1989年の第15回アジア野球選手権大会では、7ヶ国中、中国チームは第4位となり、アジア3強との差を縮める躍進を野球強化政策によって果たした。

また、同年、天津体育学院青年チームのメンバーが天津チームに入り、モスクワで行われた4ヶ国招待試合において好成績を上げた。また、天津体育学院の2名の少年が主力となって参加

した世界大会で3位となった。さらに、同年に北京体育師範学院少年野球チームが第1回AA級世界少年野球選手権大会で3位となったことから少年野球の育成に効果を得たことを実感した。

一方、同年、二化杯国際社会人野球招待大会を福州市にて行ない、中国の社会人野球が国際大会へ進出を果たす程に進展した。

3) 日中戦争終了の1945年から1960年までと1972年から1989年までの中国における各々の野球活動状況の比較にみる中国野球の推進発展

1974年の国家体育運動委員会の全国野球大会の開催への働きかけによって全国大会が復活し、1979年には中国野球・ソフトボール協会が設立され、国家体育運動委員会は国際オリンピック委員会での議席の復活を成し遂げた。また、1981年には中国が国際アマチュア連合会への加入が認められ、中国野球・ソフトボール協会の指導者が国際組織で職務を担当した。1984年には中国野球・ソフトボール協会主席の魏明がアジア野球連盟の副主席に選ばれ、秘書長の唐風翔がアジア野球連盟の青年委員会委員となり、このように中国国内において野球の組織が形成され、国外における国際野球組織での活躍がなされた。

しかし、全国大会参加チーム数が、1945年から1960年までには最高で24の省・市・解放軍チームが参加していたが、1972年から1989年までには最高で14チームの参加しかなかった。また、1983年の第5回全国運動会では野球が正式種目から外されてしまった。その原因は、野球がオリンピック戦略から外れてしまったことにあり、このため各地での野球の活動停滞が起これ、全国運動会への参加チーム数の減少を引き起こした。

一方、高校野球は、1957年に全国8地区野球選手権大会が行われ、全国から8チームが参加した。1983年には初めて第1回全国高校野球招待大会が開催され13チームが参加し、1957年の参加数を上回ったが、その後、毎年開催される

ものの各年にて4チームから8チームの参加であり、1957年を上回る参加チーム数とはならず、高校野球が1945年から1960年に比べて1972年から1989年までの推進発展はみられなかった。

これに対して、1982年に中国で労働者の野球組織が誕生して活動を始め、1987年には第1回全国労働者野球招待大会が5チームの参加で開催され、その後、1988年に6チーム、1989年に4チームが参加して行われていた。これは中国での社会人野球の誕生であり、1945年から1960年にはみられなかった野球の活動が起こった。

さらに、1986年には天津体育学院が野球の中国第一推進校となって児童・少年・青年への野球の一貫指導育成体制が中国で初めて作られ、翌年には国家体育運動委員会が児童・少年からの一貫指導の育成訓練体制を建設して始めた。その成果は、1988年から現れて第1回AA級世界少年野球選手権大会で3位という好成績をあげている。

また、1985年以降、アジア野球選手権大会、世界青年野球選手権大会、4カ国招待大会、世界少年野球選手権大会、国際社会人野球招待大会などへの積極的な参加が行われるようになった。

このように日中戦争終了の1945年から1960年までの野球活動と1972年から1989年までの中国における各々の野球活動状況の比較から、1972年以降には、特に児童野球の誕生、少年野球の誕生、社会人野球の誕生とこれらにおける国際大会への積極的な参加進出が大きな違いとしてみられ、1972年以降の中国野球は、子どもから大人へと幅広い年代層に大きく拡大推進発展されていったことが明らかとなった。

2. 1972年からの日中間の野球交流活動が、1960年以前と比べて1972年以後の中国の野球活動状況へ及ぼした影響。

1) 日中間の野球交流活動は何をしたのか？

①日本から中国へ訪問し、どんな日中間の野球交流活動が行われたのか？

1975年、神戸市の友好の船野球チームが天津を訪問し、天津野球チームと公開競技を行い、

四川、甘粛、八一、陝西などのチームが見学したのが日中国交正常化からの日中の野球交流の再開であった。社会人による野球交流は、この年から1987年までの13年間に13回行われ、その内訳は、親善試合が7回、野球指導合同練習が4回、会見や座談会が4回であった。

日本の元プロ野球のコーチや選手による中国への訪問は、1976年から1984年の9年間に5回行われ、その内訳は、野球指導が5回、同時にコーチ指導を行ったのが3回、また、審判指導を行ったのが1回であった。

大学生チームによる中国への訪問は、1975年から1982年までの8年間に6回行われ、いずれも親善試合であった。

高校生以下のチームと野球連盟による中国への訪問は、1985年から1987年の3年間しかなく、その内訳は、会見が2回、親善試合が4回、合同練習が1回、審判指導が1回であった。

1986年に日本軟式野球中国訪問団が北京と上海に招待され、両国の軟式野球交流協力のための交流協定を締結した。

②中国から日本へ訪問し、どんな日中間の野球交流活動が行われたのか？

中国から日本へ訪問しての野球交流は、1977年から始まり、1987年の11年間に17回行われ、その内訳は、大会や野球練習視察が7回、合同練習や野球技術指導が5回、親善試合が4回であった。また、1986年に中国野球・ソフトボール協会の3人が、日本軟式野球連盟招待で第41回国民体育大会の開会式と全日本軟式野球大会の開会式に出席し、試合を見学し、座談会を行った。

2) 日中間の相互の野球交流活動は、1972年以降の中国野球の発展にどんな影響を与えたのか？

1982年に中国では社会人野球が誕生したが、日本から中国へ訪問した1980年～1981年までの3回の社会人野球のコーチとチームの交流があり、一方、中国から日本へ4回訪問した1977年～1981年の日本の社会人野球との交流がみられた。これらの日中の野球交流活動が中国での社

会人野球の誕生に大きな影響を及ぼしたと考えられる。その労働者野球の誕生まで中国では自ら労働者が野球チームを作って野球大会もすることはなかったが、日本を訪問して、その存在を知り、日本から労働をしながら行う野球活動を知って学んだことにより、中国の労働者が自らの手でチームを作り、余暇を利用した野球活動を推進発展させることに繋がったと考えられよう。

特に中国での社会人野球の誕生に大きな影響を及ぼしたのは、中国から日本への訪問では、1980年に中国野球視察団が東京で第26回世界アマチュア野球選手権大会を視察したのに始まり、1981年～1986年まで中国野球チームが日本へ5回訪問して社会人野球チームと対戦したこと。また、1986年に日本で第41回国民体育大会の開会式とそこでの全日本軟式野球大会の試合を見学したこと。さらに、日本から中国へ1985年に訪問し、社会人野球の指導者が野球指導をしたこと。また、1986年に中国から招待された日本軟式野球連盟中国訪問団が北京と上海を訪れて国家体育運動委員会と会見をしたことなどがあげられる。これらの日中相互の野球交流は、アマチュア野球の労働者の野球の存在を知る上で、その交流活動を大いに参考にして、中国での社会人野球大会の開催に大きな影響を与えたと考えられた。これらの結果、1987年には第1回全国労働者野球招待大会の開催がなされるに至ったと言えよう。

さらに、1986年に天津体育学院にて児童・少年・青年の野球の一貫指導育成体制がはじまり、これまでなかった児童や少年の野球が誕生したことに関しては、中国から日本へ1980年に訪問し、中国野球視察団が日本の少年チームの野球の試合と練習を視察しており、また、1985年に日本から中国へ訪問した日本少年野球協会が天津、北京、上海、蘇州を訪れて指導者と会見を行ったことが影響したものと考えられた。

中国野球のレベル向上のために1985年以降に国際大会へ中国は積極的に参加するようになった。この点に関しては、1980年に中国が日本へ訪問した際に、東京で第26回アマチュア野球選

手権大会を視察したことによって、翌年に中国が国際アマチュア野球連合会へ加入したこと。これは1972年以降のそれまでの日中間の社会人野球の多くの交流が布石となっていたことが考えられる。また、1984年には、中国野球・ソフトボール協会の主席である魏明がアジア野球連盟の副主席となったことが、国際大会へ参加する門戸を開けることに繋がったと考えられた。

このように1972年の日中国交回復以降の日中間にみられた日中相互の野球交流は、中国野球の各年齢層における拡大発展と特に国際大会へ出場するエリート野球の推進発展に大きな貢献をもたらしたと考えられた。

さらに、1986年に日本軟式野球連盟の招待で中国からの訪問団が日本の軟式野球を見学したこと。また、同年に日本側が中国へ訪問し、国家体育運動委員会と日本軟式野球連盟の間で友好交流協定が締結され、翌年から中国における軟式野球の日中の80～90の友好都市間の軟式野球交流を引き起こし、年齢に関係なく中国の野球の普及発展に大きな貢献をもたらしていたことが明らかとなった。

しかしながら、1989年以降から現在までの日中間の野球交流に関する文献が見当たらず、この点はその後の日中間の野球交流実態がどのように行われてきたのか、そして、現在の中国野球の現状の普及程度に留まってしまったのかを十分に明らかにすることはできず、この点は本研究の今後の大きな課題であろう。

3) 日中間の相互の野球交流活動の問題点とその限界は何だったのか？

1972年以降の日中野球交流によって、児童野球、少年野球、青年野球、社会人野球の誕生がみられ、国際大会への積極的な参加進出がなされたことが明らかとなったが、しかし、1986年に行われた児童から青年までの全国大会は5大会^{注98)}行われていた。いずれの大会にも各大都市の代表チームの参加であり、1大会に7～16代表チームしか参加していなかった。

一方、各大都市における全市大会へ参加していたチーム数状況の記載は、『中国棒球運動史』

ではなく、そのチーム数は不明であり、その状況は想像するしかないが、2014年に筆者が中国広東省広州市で調べた小学校数は、953校であり、その内たった30校^{注99)}しか全市野球大会への参加がなされていなかった。1986年は、児童野球が始まったばかりであり、2014年よりも野球大会に参加するチーム数が、少なかったことは容易に想像可能である。

1972年以降、中国野球協会や国家運動委員会が、中国人の一流野球競技者の育成を目標とした各大都市のチームや国家チームのための野球技術指導による野球競技力向上を目指して日中間の相互の野球交流活動を盛んに行なってきた。しかし、1986年からは、子どもたちの野球競技水準の向上を目指した野球技術指導を行い、子どもたちの野球競技力を育成するための中国野球の大きな転換期にあったと考えられた。

しかしながら、この子どもたちからの野球技術指導への転換は、児童、少年、青年に関しても、将来のプロとして一流野球競技者の育成のための都市代表チームの育成が中心であり、一流野球競技者育成のエリートピラミッドへ取り込むための児童からの一貫野球教育指導に力を注いだのではなかろうか。この点が、日本のほとんどの小学校において、課外活動で野球を実施している日本との大きな違いであり、中国野球がその後から現在までも日本と同じような野球競技の大きな底辺拡大普及に繋がらなかった原因であると考えられた。

1972年の日中国交回復から盛んに行われた日中間の相互野球交流は、中国への野球技術の向上や野球組織の拡大構成にとっては多大なる貢献をしてきた。しかし、中国の独自のプロ選手養成のための一流野球競技者育成のためのシステム自体の問題によって、盛んに行われた日中野球交流にも関わらず、中国野球の小学校における底辺拡大普及とは至らない限界をもたらしたものと考えられた。

VI. まとめ

1945年の日中戦争終戦から1960年までの中国

野球活動の状況を把握し、1972年の日中国交正常化から1989年までの中国の野球活動状況を前者と比較して、どのような野球活動の違いが生じてきたのかを明らかにする。次にその違いが、1972年の日中国交正常化以降の日中間の相互の野球交流活動による影響によって生じたのかを検証し、その日中間の野球交流活動が、中国野球活動の推進発展に貢献したのかを検討した。

日中国交正常化からの日中間の野球交流の再開によって、社会人による野球交流は、この年から1987年までの13年間に13回行われ、その内訳は、親善試合が7回、野球指導合同練習が4回、会見や座談会が4回であった。また、日本の元プロ野球のコーチや選手による中国への訪問は、1976年から1984年の9年間に5回行われ、その内訳は、野球指導が5回、同時にコーチ指導を行ったのが3回、また、審判指導を行ったのが1回であった。また、大学生チームによる中国への訪問は、1975年から1982年までの8年間に6回行われ、いずれも親善試合であった。

高校生以下のチームと野球連盟による中国への訪問は、1985年から1987年の3年間しかなく、その内訳は、会見が2回、親善試合が4回、合同練習が1回、審判指導が1回であった。さらに、1986年に日本軟式野球中国訪問団が北京と上海に招待され、両国の軟式野球交流協力のための交流協定を締結した。

中国から日本へ訪問しての野球交流は、1977年から始まり、1987年の11年間に17回行われ、その内訳は、大会や野球練習視察が7回、合同練習や野球技術指導が5回、親善試合が4回であった。また、1986年に中国野球協会の3人が、日本軟式野球連盟の招待で第41回国民体育大会の開会式と全日本軟式野球大会の開会式に出席し、試合を見学し、座談会を行った。

このように日中間の相互の野球交流は、日中国交回復後に盛んに行われていた。次に日中戦争終了の1945年から1960年までの野球活動と1972年から1989年までの中国における各々の野球活動状況の比較を行った。

全国大会参加チーム数が、1945年から1960年までには最高で24の省・市・解放軍チームが参

加していたが、1972年から1989年までには最高で14チームの参加しかなかった。

高校野球は、1957年に全国8地区野球選手権大会が行われ、全国から8チームが参加した。1983年には初めて第1回全国高校野球招待大会が開催され13チームが参加し、1957年の参加数を上回ったが、その後、毎年開催されるものの各年にて4チームから8チームの参加であり、1957年を上回る参加チーム数とはならず、高校野球が1945年から1960年に比べて1972年から1989年までの推進発展はみられなかった。

しかしながら、1972年以降には、特に中国では軟式野球も取り入れて、児童野球の誕生、少年野球の誕生、社会人野球の誕生が始まったこと。また、これらにおける国際大会への積極的な参加進出が1945年から1960年までの野球活動との大きな違いとしてみられ、1972年以降の中国野球は、子どもから大人へと幅広い年代層に大きく拡大推進発展されていったことが明らかとなった。このように1972年の日中国交回復以降の日中間にみられた日中相互の野球交流は、中国野球の各年齢層における拡大発展と特に国際大会へ出場するエリート野球の推進発展に大きな貢献をもたらしたと考えられた。

このように1972年以降、中国野球協会や国家体育運動委員会が、中国人の一流野球競技者の育成を目標とした各大都市のチームや国家チームのための野球技術指導による野球競技力向上を目指して日中間の相互の野球交流活動を盛んに行なってきた。しかし、1986年からは、子どもたちの野球競技水準の向上を目指した野球技術指導を行い、子どもたちの野球競技力を育成するための中国野球の大きな転換期にあったと考えられた。

しかしながら、児童、少年、青年に関しても、将来のプロとしての一流野球競技者の育成のための都市代表チームの育成が中心であり、一流野球競技者育成のエリートピラミッドへ取り込むための児童からの一貫野球教育指導に力が注がれており、中国野球がその後から現在までも日本のほとんどの小学校の課外活動で野球を実施している状況と同じような野球競技の大きな

底辺拡大普及に繋がらなかった原因であると考えられた。

1972年の日中国交回復から盛んに行われた日中間の相互の野球交流の中国への野球技術の向上や野球組織の拡大構成にとっては多大なる貢献をしてきた。しかし、中国の独自のプロ選手養成のための一流野球競技者育成システム自体の問題によって、盛んに行われた日中野球交流にも関わらず、中国野球の小学校における底辺拡大普及とは至らない限界をもたらしたものと考えられた。

注

- 注1 盧溝橋事件が、1937年7月7日に中華民国北京の(北平)西南方向の盧溝橋で起きた。日本軍と中国国民革命軍第二十九軍との衝突事件である。その日の夜、豊台に駐屯していた支那駐屯歩兵第一聯隊第三大隊第八中隊の将兵が盧溝橋付近の河原で夜間演習中、実弾を撃ち込まれ、点呼時に兵士の1人が所在不明だったため、中国側の攻撃があったと判断して起きたと言われる。日中戦争(支那事変)の発端となったとされる。(富谷至, 森田憲司, 『概説中国史下-近世-近現代』(昭和堂, 2016) pp. 257-267.)
- 注2 共産党が1949年10月1日北京で中華民国に代わる国家として「中華人民共和国」の成立を宣言した。(富谷至, 森田憲司, 『概説中国史下-近世-近現代』 pp. 267-276.)
- 注3 1958年から中国では、中華人民共和国の毛沢東共産党主席が主導した農作物と鉄鋼製品の増産政策である大躍進政策が行われた。1957年6月に中国共産党によるプロレタリア独裁を批判した民主派や知識人を「右派分子」とレッテルを貼って弾圧した反右派闘争で中国共産党への批判は不可能となった上に、中国共産党内部でも毛沢東への個人崇拜が絶対化されたため、党内主導権を得た毛沢東の指導の下、1958年5月から1961年1月までの間に中華人民共和国では農作物と鉄鋼製品の増産命令が発せられた。反対派を粛清し、合作社・人民公社・大食堂など国民の財産を全て没収して共有化する共産主義政策を推進した毛沢東は、核武装や高度経済成長によって先進国であるアメリカ合衆国やイギリスを15年で追い落とすと宣言した。しかし非科学的な増産方法の実施、四害駆除運動で蝗害を招く、政策に反対する多数の人民を処刑死・

- 拷問死に追い込んだため中国国内で大混乱を招き、中華人民共和国大飢饉（推定2,000万人が餓死）の発生、産業・インフラ・環境の大破壊、中華人民共和国最少出生数記録更新を招いた。（大沢昇、『ワードマップ現代中国』（新曜社、2013）pp. 54-62.）
- 注4 中華人民共和国で1966年から1976年まで続き、1977年に終結宣言がなされた。中国共産党中央委員会主席毛沢東主導による「文化改革運動」を装った劉少奇からの奪権運動、政治闘争である。全称は無産階級文化大革命（プロレタリア文化革命）、「造反有理」（謀反には道理がある）を叫ぶ紅衛兵に始まり、中国共産党指導層の相次ぐ失脚、毛沢東絶対化という一連によって、中国社会は激しく荒れ乱れ、現代中国の政治・社会に大きな禍根を残して挫折した。（ブリタニカ国際大百科事典「文化大革命」コトバンク <https://kotobank.jp/word/%E6%96%87%E5%8C%96%E5%A4%A7%E9%9D%A9%E5%91%BD-128350>）
- 注5 1972年日本と中国の国交が回復した。（田中仁、菊池一隆、加藤弘之、日野みどり、岡本隆司、『新図説中国近現代史』（法律文化社、2012）p184.）
- 注6 陈显明、梁友德、杜克和、『中国棒球运动史』（武汉出版社、1990）pp. 1-201.
- 注7 郭凤岐、『天津通志・体育志』（天津社会科学院出版社、1994）p. 216.
- 注8 上海体育志編纂委員会編、『上海体育志』（上海社会科学院出版社、1996）pp. 228-234.
- 注9 大连市志办公室編、『大连市志、大连体育志』（大连出版社、2000）pp. 84-86.
- 注10 陈显明、梁友德、杜克和、『中国棒球运动史』pp. 34-41.
- 注11 中華人民共和国の國務院の直属の機構であり、全国の体育活動を主管する。1952年に「中華人民共和国体育運動委員会」が成立したのが、前身であり、1998年に「国家体育運動委員会」を「国家体育総局」に改組された。（中国体育百科全書編集委員会、『中国体育百科全書』（人民体育出版社、2001）pp. 66-67.）
- 注12 1952年に天津市野球協会が成立した。同年天津の中学生が主に組織されて北斗星野球チームが作られ、天津解放後に天津市で第一の野球チームとなり、彼らは野球技術を指導育成されて天津野球活動を発展させる人材となった。1950年から1960年までに全国第1回と第2回の野球選手権大会、11地区の野球対抗戦、さらに、第1回全国運動会の野球大会に参加し、いずれも3位から5位の成績を残した。（郭凤岐、『天津通志・体育志』p. 216-217.）
- 注13 1949年に新中国成立後、党と政府は体育運動の普及とレベル向上促進のための重要な施策として、運動競技会を開始した。1956年に国家体育運動委員会が『中華人民共和国運動競技制度暫定規定』を公布し、全国レベルの大会として総合性運動会を設けて4年毎に一度実施するものとした。第1回全国運動会は、1959年9月13日～10月3日北京で開催され、29の省・市・自治区と直轄市から7,707名が参加して行われた。（中国体育百科全書編集委員会、『中国体育百科全書』p. 187.）
- 注14 体育専門教育のために設立された学院であり、1952年に華東体育学院が最初に設立され、1953年に中央体育学院が設立され、その後の中南、西南、東北、西北体育学院が設立された。（中国体育百科全書編集委員会、『中国体育百科全書』p. 303.）
- 注15 抗日戦争時に国民党の軍隊に共産党の軍隊が組み込まれ「国民革命第八路軍」となった。1945年に日本が敗北し、抗日戦争が終わると国共内戦が再燃した。1946年に共産党軍は「中国人民解放軍野戦部隊」として活動を始めた。略称は「解放軍」。（矢吹晋、『中国人民解放軍』（講談社、1996）p. 23.）
- 注16 国民党の国民政府軍と共産党の紅軍は一致して日本軍と戦うべきであるという国民の声が強まり、両軍は停戦に応じ、1937年に日中戦争が始まったことで第二次国共合作が成立した。この抗日民族統一戦線成立によって紅軍は形の上では国民政府軍蔣介石の指揮下に入り、八路軍および新四軍といわれるようになり、日本軍にゲリラ戦術によって激しい抵抗を開始した。（穴戸寛、内田知行、馬場毅、三好章、佐藤宏、『中国八路軍、新四軍史』（河出書房新社、1989）pp. 9-18.）
- 注17 野球選手として有名であり、後に野球コーチとなる。幼少期から横浜に滞在し、1905年横浜の中華野球チームに入り、1922年に横浜野球リーグ戦で優勝。1932年に上海に戻り、野球を拡大推進し、翌年に上海野球チームに加入した。1935年中華民国第6回全国運動会の野球大会で優勝。1937以後に中山、広州、香港等で野球を発展させた「神州野球の父」と呼ばれ、軍隊で野球指導をし、その後、上海野球チームの監督となり、1956年と1957年の2年連続、全国大会

- で優勝した。(http://famous.usatour.com.cn/history/3/liangfuchu.html)
- 注18 中華民国・中華人民共和国の軍人。中国共産党員として中華人民共和国建国に大きな功労を残した。1927年、中国共産党に入党し、1936年に紅軍第二方面軍司令官、1937年に八路軍120師長に任命された。1952年より、国家体育運動委員会主任を兼務。1954年、國務院副総理に任命され、同年に人民革命軍事委員会副主席に任命。1955年、中華人民共和国元帥となった。(賀曉明、謝武申、王鼎華、『共和国体育的奠基人噶賀龍』(上海錦綉文章出版社、2014) pp. 1-58.)
- 注19. 陈显明, 梁友德, 杜克和, 『中国棒球运动史』 pp. 42-89.
- 注20 甲陽中学の剛球投手として甲子園大会で活躍。慶応大学でも投手、外野手、4番打者で17年春のリーグ戦では首位打者となり、六大学を代表する強打者であった。1923年に阪神に入団。オープン戦の6ホームーで人気沸騰。2年後には毎日へ移り、本塁打と打点で2冠王となる。監督、コーチとしても多くの後進を育て、1955年と1966年に大洋球団代表を歴任した。(https://baseball-museum.or.jp/hall-of-famers/hof-087/)
- 注21 元プロ野球選手 イーグルス、黒鷲、大和、巨人(内野手)。引退後は大毎2軍コーチ、1軍コーチ、大洋2軍コーチ、1軍コーチ、2軍監督、広島1軍コーチで監督・コーチを歴任。選手達からは「お父さん」と呼ばれるほど愛され、名コーチとして手腕を振るった。(https://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%B1%B1%E7%94%B0%E6%BD%94)
- 注22 元プロ野球選手、巨人と大洋で捕手。(https://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%A4%A7%E6%A9%8B%E5%8B%B2)
- 注23 東京六大学リーグとプロ野球を通じて史上最高の三塁手と讃えられる。立教大学では首位打者2回、通算本塁打記録をも更新。1958年に巨人軍に入ると本塁打、打点の2冠を獲得して新人王となる。V9(巨人軍が1965年から1973年まで9年間連続してプロ野球日本シリーズで制覇)の牽引力となり、好機を逃さぬ打撃とスピード感みなぎる守備でファンを魅了し続けた。数々のタイトルに輝いて1974年に引退。1976年、1977年に同軍監督としてリーグ優勝を果たす。(https://baseball-museum.or.jp/hall-of-famers/hof-086/)
- 注24 現在の野球殿堂博物館。1959年、日本で最初の野球専門博物館として後樂園球場に隣接する場所に開館し、1988年、東京ドームの建設に伴いドーム内に移転、従来の2倍の広さとなって新装開館した。プロ・アマ問わず国内外の野球に関する資料を収集、保管し、野球殿堂入りした方の資料や展示がある。(https://baseball-museum.or.jp/)
- 注25 1937年に開場した東京都文京区にあった野球場。プロ野球を行える球場として大日本帝国陸軍東京砲兵工廠の跡地に建設された。老朽化により、1987年に閉鎖され隣接する競輪場跡に東京ドームが建設され、球場としての役割を東京ドームに引き継ぐこととなった。収容人数:42,337人、東京巨人軍(のちに読売ジャイアンツ)のホームグラウンドであった。(https://nationalstadium-tours.com/?area=32460)
- 注26 1954年に世界レスリング選手権の際に旧徳川邸の跡地に建設され、1964年の東京オリンピックでは、体操競技や水球の会場として使用された。その後、1990年に改築工事が行われ、卓球・テニス・バレーボールなどさまざまな室内競技の大会を開催した。2013年4月にリニューアルオープンし、より数多くのイベント会場として活用されている。(https://www.joc.or.jp/past_games/tokyo1964/memorialplace/3.html)
- 注27 1977年、株式会社横浜スタジアム設立。翌年、日本初の多目的スタジアムとして完成し、横浜大洋ホエールズのフランチャイズ新球場として誕生した。(https://www.yokohama-stadium.co.jp/about/history/)
- 注28 1931年、早稲田大学在学中より雑誌『野球界』の編集に携わり、1937年に編集長となる。戦後1946年『ベースボール・マガジン』社を設立。出版を通して野球の発展に貢献するとともに、常にフェアプレー精神を訴えた。後年オリンピック競技種目の出版を手がけ、東欧の各国と友好関係を築いた功により勲三等瑞宝章を授与される。1986年にはソ連へ野球を紹介して新たな国際交流に尽力した。(https://baseball-museum.or.jp/hall-of-famers/hof-096/)
- 注29 元プロ野球選手(巨人投手)。引退後は近鉄の2軍投手コーチを経て、中日で2軍投手コーチ・1軍バッテリーコーチを歴任した。(https://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%A4%A7%E5%8F%8B%E5%B7%A5)
- 注30 元プロ野球選手(内野手)。八幡浜高校では、1963年の春季四国地区高等学校野球大会に初優勝するものの、甲子園には届かなかった。卒業後は東芝へ入社。1966年の都市対抗野球では

- 中心打者として、チームの準々決勝進出に貢献する。1967年ドラフト会議で東映フライヤーズから2位指名を受け入団。100メートル11秒台の俊足、鉄砲肩、ノンプロ通算20本塁打。
(<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E4%BA%8C%E5%AE%AE%E5%BF%A0%E5%A3%AB>)
- 注31 1955年から元国家体育運動委員会が主導して北京、天津、上海に設立されたアマチュア体育学校であり、高レベルの選手育成を行う学校で学校教育と各種のスポーツ種目で強化鍛錬が少年や青年に行われている。そこでの優秀な人材は次にプロとして養成される。
(https://baike.baidu.com/item/%E4%B8%9A%E4%BD%99%E4%BD%93%E6%A0%A1/7820715?fromModule=search-result_lemma)
- 注32 実力と人気を兼ね備えた遊撃手として早稲田大学から1954年巨人に入団。同年112試合出場。107安打、本塁打15、打率.314で新人王となり、その華麗な守備がさらに人気を呼んだ。現役引退後広島、ヤクルトのコーチを経て、1978年ヤクルト監督として球団史上初のリーグ優勝と日本一を達成した。また1982年、1983年には西武で日本シリーズを制覇し、両リーグにわたる優勝で指導力を高く評価された。
(<https://baseball-museum.or.jp/hall-of-famers/hof-105/>)
- 注33 1979年に設立された中国野球・ソフトボール協会であり、1981年に国際アマチュア野球連盟へ加入。1985年にアジア野球連盟へ加入し、申伝任が副会長となった。1986年に野球単独の中国野球協会となった。
(<https://baike.baidu.com/item/%E4%B8%AD%E5%9B%BD%E6%A3%92%E5%9E%92%E7%90%83%E5%8D%8F%E4%BC%9A/12574557?fr=aladdin>)
- 注34 1939年中国共産党員となり、北京市体育運動委員会共産党委員書記。
(<https://baike.baidu.com/item/%E9%AD%8F%E6%98%8E/5999243?fr=aladdin>)
- 注35 北京市豊台区にある北京豊台体育センター内にある野球場。第11回アジア大会、第7回全国運動会で野球競技に使用された。
(https://baike.baidu.com/item/%E4%B8%B0%E5%8F%B0%E4%BD%93%E8%82%B2%E4%B8%AD%E5%BF%83/8046012?fr=aladdin#2_4)
- 注36 陈显明、梁友徳、杜克和、『中国棒球运动史』p. 79.
- 注37 1956年、中島健蔵（仏文学者）、千田是也（演出家）、井上靖（作家）、團伊玖磨（作曲家）らが中心となり、日中両国間の友好と文化交流を促進するための民間団体として東京で創立された。その活動を通じ、日中国交正常化の実現や日中平和友好条約締結に向けての国民世論の形成に寄与した。日中両国の文化交流を通じて、友好、相互理解を一層促進するために活動を続けている。
(<http://www.nicchubunkai1956.jp/>)
- 注38 世界野球連盟（＝国際アマチュア野球連盟、International Baseball Federation：IBAF）は、世界各国の野球協会が加盟していた国際組織である。2013年に国際ソフトボール連盟（ISF）と統合され、世界野球ソフトボール連盟（WBSC）を結成した。1938年に設立され、スイスのローザンヌに本部がある。当時は124の国と地域が加盟していた。
(<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%9B%BD%E9%9A%9B%E9%87%8E%E7%90%83%E9%80%A3%E7%9B%9F>)
- 注39 日本代表は監督が石井藤吉郎、選手は社会人野球チームから選抜構成され、大学生は東海大学の原辰徳のみが選出されて出場した。
(<http://japanbaseball.web.fc2.com/ibaf/worldcup1980.html>)
- 注40 元プロ野球選手（巨人軍外野手、一塁手、投手）引退後に巨人軍コーチ・2軍監督、解説者・実業家となった。
(<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%9B%BD%E6%9D%BE%E5%BD%B0>)
- 注41 元プロ野球選手（巨人軍投手）、その後、巨人・ロッテコーチ、解説者・評論家。
([https://ja.wikipedia.org/wiki/%E4%B8%AD%E6%9D%91%E7%A8%94_\(%E6%8A%95%E6%89%8B\)](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E4%B8%AD%E6%9D%91%E7%A8%94_(%E6%8A%95%E6%89%8B)))
- 注42 台北一中、慶応大学、鐘紡で外野手として活躍し、アマ球界の審判員や野球解説者を経て、社会人野球の運営に携わった。国際派野球人として知られ、1992年野球の五輪正式競技実現には国内及び国際機関の統一のため多大な貢献を果たした。またプロ球界とともに日本野球会議を設立し、青少年の野球人口拡大を進めた。1997年日本野球連盟会長就任。
(<https://baseball-museum.or.jp/hall-of-famers/hof-123/>)
- 注43 陈显明、梁友徳、杜克和、『中国棒球运动史』p. 72.
- 注44 現在の公益財団法人日本野球連盟（Japan Amateur Baseball Association：JABA）は、日本の社会人野球を統括する団体。1949年に日本社会人野球協会として創設され、1985年に財団法人となり、2013年に公益財団法人に移行して現在の名称になった。都市対抗野球大会、社会人野球日本選手権大会、クラブチームによる全日本クラブ野球選手権大会と、2006年から2014

- 年に行われていたナショナルクラブベースボールシリーズを主催しており、この4大会以外もすべて傘下連盟（地区連盟ないし都府県連盟）の主催か共催である。（<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%97%A5%E6%9C%AC%E9%87%8E%E7%90%83%E9%80%A3%E7%9B%9F>）
- 注45 陈显明, 梁友德, 杜克和, 『中国棒球运动史』 p. 72.
- 注46 慶応大学卒業後、日本石油に入社。1956年の都市対抗野球大会で29イニング連続無失点新記録を達成。橋戸賞を受賞し優勝を飾る。巨人入団の1957年新人王。1958年、1959年最高殊勲選手賞。1959年最多勝を獲得。実働8年。119勝88敗。防御率2.20。コーチ、スカウトを経て2度に亘り巨人監督に就任。リーグ優勝4度、日本シリーズを2度制した。（<https://baseball-museum.or.jp/hall-of-famers/hof-118/>）
- 注47 868本の本塁打記録を達成した努力の人。早稲田実業高校では投手四番打者で1957年春の選抜大会に優勝。1959年巨人に入団。一本足打法のホームラン打者として9年連続日本一に貢献した。シーズン最多55本塁打。一試合4本塁打（タイ）、本塁打王15回、打点王13回、MVP 9回、首位打者5回、2年連続三冠王、ベストナイン18回などプロ野球最多の記録保持者。1977年第一回国民栄誉賞受賞。監督就任は、巨人（1984年～1988年）、ダイエー（1995年～2004年）、ソフトバンク（2005年～2008年）。（<https://baseball-museum.or.jp/hall-of-famers/hof-111/>）
- 注48 1963年中日友好協会会長。中日両国の人々の親善と友好関係の発展のために尽くした。1972年に外交部顧問として中日国交正常化促進のために働いた。（https://baike.baidu.com/item/%E5%BB%96%E6%89%BF%E5%BF%97?fromModule=lemma_search-box）
- 注49 日本の実業家。正力松太郎の長男で、『読売新聞』グループ本社社長、読売ジャイアンツオーナーなどを務めた。（<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%AD%A3%E5%8A%9B%E4%BA%A8>）
- 注50 1981年国家体育運動委員会主任、共産党組書記。1984年中国体育代表団を引き連れて第23回オリンピックで金メダル15個を獲得し、中国はそれまで獲得金メダル無しであったが、中国体育会に歴史的な重大な成果をあげた。（<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%AD%A3%E5%8A%9B%E4%BA%A8>）
- 注51 『中国青年報』の副編集長を歴任し、『体育報』の編集長と社長。国家体育系副主任武術研究院院長。中国武術協会委員長。中国体育発展戦略研究会副会長。（https://baike.baidu.com/item/%E5%BE%90%E6%89%8D/4187760?fromModule=search-result_lemma）
- 注52 陈显明, 梁友德, 杜克和, 『中国棒球运动史』 p. 83.
- 注53 元プロ野球選手（巨人内野手）、その後、巨人とオリックスでコーチ・監督、解説者・評論家も努めた。（<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%9C%9F%E4%BA%95%E6%AD%A3%E4%B8%89>）
- 注54 元プロ野球選手（巨人、大洋の投手）、その後、巨人コーチ・解説者・評論家。大洋時代の登録名は関本充宏。（<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E9%96%A2%E6%9C%AC%E5%9B%9B%E5%8D%81%E5%9B%9B>）
- 注55 1950年17才で新生国鉄スワローズに入団。早くから大黒柱として活躍し、次々に投手記録を塗り替えて、球界に君臨する大投手となった。特に対巨人、対長嶋に奮起してファンを歓喜させた。巨人に5年在籍。通算400勝、4,490奪三振、14年連続20勝以上の前人未到大記録を樹立した。1974年にはロッテの監督として日本シリーズを制覇した。（<https://baseball-museum.or.jp/hall-of-famers/hof-089/>）
- 注56 早稲田大学教育学部体育教授。（<https://cir.nii.ac.jp/crid/1410282679078762117>）
- 注57 日本にポニーベースボールが紹介されたのは、1974年に当時カリフォルニア州ロサンゼルス市で米国ポニーリーグのフィールドディレクターをしていたミルトン・デュベイン氏が知人を通じて初代日本協会理事長の伊藤慎介に紹介したのが始まりである。その後、伊藤を中心に発足準備が始まり1975年5月5日の子供の日、日本ポニーベースボール協会として川崎球場で第1回の日本選手権大会を開催致した。翌年にはブロンコリーグ（U-12）も発足し、その年の8月、日本ポニー代表は日米親善大会のため渡米。ロサンゼルスを中心に7試合を行い3勝4敗。それ以降来日と渡米が1年ごとに繰り返され、現在まで40回を超える伝統を継続。（http://www.pony-japan.com/p_league/league/）
- 注58 1974年にアメリカからポニーベースボールを紹介され、発足準備を行い、日本で1975年に日本ポニーベースボール協会を創立した創立者。その年に川崎球場で第1回日本選手権大会を開催した。（<https://pony-japan.com/about/pony/>）

- 注59 当時のアジア武術連盟事務局長、日中友好協会理事長、日本武術太極拳連盟副会長。
(<http://www.peoplechina.com.cn/maindoc/html/35year/guanlian/0610teji-3.html>)
- 注60 元アマチュア野球選手・指導者である。ポジションは外野手。立教大学では外野手と主将を務めて、1951年の秋季リーグでは首位打者を獲得。卒業後には社会人野球の熊谷組チームに入団し、1957年の都市対抗野球では主将として活躍し、チームの初優勝に貢献した。1971年から1974年までに母校の立教大学の監督を務め、本田技研の監督を経て、1982年の第27回世界アマチュア野球選手権大会の日本代表のコーチを務めた。1985年第13回アジア野球選手権大会優勝監督。日本野球連盟の理事に就任し、1987年に中国での野球指導に貢献したことにより、池田善吾とともに連盟から特別表彰を受けた。その一方で、NHKで高校野球、大学野球、社会人野球等の解説者を務めた。
(<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E7%AF%A0%E5%8E%9F%E4%B8%80%E8%B1%8A>)
- 注61 元アマチュア野球選手(投手)日本で初めてキューバを抑えた投手。芝浦工業大学に進学。東都大学野球リーグでは、エースとして1968年秋季リーグで7年振りに優勝。最高殊勲選手、最優秀投手、ベストナイン(投手)に選出されている。社会人野球の三菱自動車川崎に進む。アマチュア野球世界選手権日本代表に選出される。1972年のドラフト会議で東映フライヤーズから5位指名を受けたが、これを拒否。1973年の都市対抗では日本鋼管に補強され出場し、チーム初優勝に貢献した。同年にはインターコンチネンタルカップ、第10回アジア野球選手権大会の日本代表となる。その後、三菱自動車川崎監督となり、1985年第13回アジア野球選手権大会優勝コーチを努めた。
(<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%B1%A0%E7%94%B0%E5%96%84%E5%90%BE>)
- 注62 陈显明、梁友德、杜克和、『中国棒球运动史』p. 81.
- 注63 アジア野球選手権大会(BFA Asian Baseball Championship)は、アジア野球連盟(BFA)主催により、2年に1回(夏季オリンピックとIBAFインターコンチネンタルカップのそれぞれ前年、その内オリンピック前年の大会はオリンピックの大陸予選を兼ねて)、もしくは3年に1回開催される、野球のアジア地域における国別代表による国際大会である。予選として西アジアカップ・東アジアカップも開催される。
(<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%A2%E3%82%B8%E3%82%A2%E9%87%8E%E7%90%83%E9%81%B8%E6%89%8B%E6%A8%A9%E5%A4%A7%E4%BC%9A>)
- 注64 日本の元卓球選手、卓球指導者。第3代国際卓球連盟会長、日本卓球協会副会長(1987年-1994年)を歴任した。現役時代は日本代表として世界卓球選手権で計12個の金メダルを獲得し、日本卓球界の黄金期を代表する選手として活躍した。引退後は卓球の普及に尽力し、また1971年には「ピンポン外交」の立役者の一人として米中関係の改善に努めた。1987年からは第3代国際卓球連盟会長、日本卓球協会副会長を務め、1991年の世界選手権千葉大会では、南北朝鮮の合同チーム結成に尽力した。
(<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E8%8D%BB%E6%9D%91%E4%BC%8A%E6%99%BA%E6%9C%97>)
- 注65 元社会人野球選手(日産自動車)で、引退後に日産自動車硬式野球部・日産自動車九州硬式野球部、熊本県立熊本工業高等学校の硬式野球部、第28回IBAFワールドカップ日本代表の監督を務めた。
(<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E7%94%B0%E4%B8%AD%E7%A7%80%E5%A4%AA>)
- 注66 第67回全国高等学校野球選手権大会は、1985年8月8日から8月21日まで阪神甲子園球場で行われた。49代表が出場し、PL学園が宇部商を4-3で下し、2年ぶり3回目の優勝を果たした。
(<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E7%AC%AC67%E5%9B%9E%E5%85%A8%E5%9B%BD%E9%AB%98%E7%AD%89%E5%AD%A6%E6%A0%A1%E9%87%8E%E7%90%83%E9%81%B8%E6%89%8B%E6%A8%A9%E5%A4%A7%E4%BC%9A>)
- 注67 陈显明、梁友德、杜克和、『中国棒球运动史』p. 76.
- 注68 中国卓球界三大巨頭の一人であり、国家体育運動委員会副主任。
(https://baike.baidu.com/link?url=0DK31nmSiE1pevXoKPCRgGnKUIQ4asT3FCDKGUHEc70xh8g325KKhOmXtosWp8yB1rT6B2CXzSCN8bwkSzf2FajLkzkAs-bcrSs3eYUff_Yw932-fzN7TEW9CMpuZph)
- 注69 ピーター・オマリー(Peter O'Malley)は、アメリカ合衆国・ニューヨーク州出身の実業家である。MLB、ロサンゼルス・ドジャースの元オーナー。父は同じくドジャース元オーナーのウォルター・オマリー。
(

- org/wiki/%E3%83%94%E3%83%BC%E3%82%BF%E3%83%BC%E3%83%BB%E3%82%AA%E3%83%9E%E3%83%AA%E3%83%BC)
- 注70 天津体育学院道奇球場は、中国プロ野球 CBL リーグの天津ライオンズの本拠地球場である。天津市河西区天津体育学院付近に1986年にドジャースのピーター・オマリーから寄贈されて建設された。1991年に第16回アジア野球選手権大会で利用された国際大会の野球競技が可能な大きさの球場である。(https://baike.baidu.com/item/%E5%A4%A9%E6%B4%A5%E9%81%93%E5%A5%87%E6%A3%92%E7%90%83%E5%9C%BA/8907473?fr=aladdin)
- 注71 首都大学野球連盟を設立。野球の国際化にも尽力。学校法人東海大学の創立者。アメリカ・ロサンゼルス・ドジャースのピーター・オマリー会長と親交があり、野球のオリンピック正式種目採用への協力要請を受けると、同氏と協調してソ連・東欧諸国への民間外交を継続。ロス五輪のソ連ボイコットで東西対立の緊張が高まる中、1989年にソビエト連邦・モスクワ大学へ野球場（松前記念スタジアム）を建設・贈呈し、国際的な野球の普及とスポーツを通じた国際交流を推し進めた。同球場で日ソ米中4カ国の大学による第1回国際学生野球大会が行われ、同大会はこの後、隔年で2007年まで開催された。(https://baseball-museum.or.jp/hall-of-famers/hof-212/)
- 注72 国際野球連盟(International Baseball Federation: IBAF) は、1938年に設立されたが、1973年には国際アマチュア野球連盟(FIBA: Federacion Internacional de Béisbol Amateur)と世界アマチュア野球連盟(FEMBA: Federacion Mundial de Béisbol Amateur)に分裂した。(https://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%9B%BD%E9%9A%9B%E9%87%8E%E7%90%83%E9%80%A3%E7%9B%9F)
- 注73 早稲田大学では、1954年秋季リーグ戦で首位打者を獲得し、優勝に貢献。主将・エース・四番打者として活躍。日本鋼管を経て、1958年早稲田大学監督に就任。1960年秋には早慶六連戦を制し、逆転優勝に導く。退任後は、1972年の日米大学野球選手権大会の創設に尽力。1988年早稲田大学監督に復帰し、1990年春に15シーズンぶりのリーグ優勝に導く。監督在任13年で4回の優勝。厳しい指導で多くの後進を育成した。(https://baseball-museum.or.jp/hall-of-famers/hof-207/)
- 注74 1968年ドラフト1位で、中日入団。現役時代は、闘志あふれる投球で人気を集め、1974年のリーグ優勝に大きく貢献した。中日監督として、1988年、1999年と2回のリーグ優勝。2003年には阪神監督として、18年振りのリーグ優勝に導いた。2011年から楽天の監督となり、2013年には球団創設9年目のチームを、初の日本一に導いた。監督として、3球団でのリーグ優勝は史上3人目、17年間で1,181勝をあげた。(https://baseball-museum.or.jp/hall-of-famers/hof-194/)
- 注75 日本のアナウンサー、野球評論家、スポーツライター。日本放送協会(NHK)アナウンサー、日本テレビ放送網(NTV)アナウンサー、のち運動部長。(https://ja.wikipedia.org/wiki/%E8%B6%8A%E6%99%BA%E6%AD%A3%E5%85%B8)
- 注76 陈显明、梁友德、杜克和、『中国棒球运动史』p. 86.
- 注77 1919年糸井浅次郎、鈴木栄両氏は少年に適し硬式のように危険がなく、しかも少年たちに野球の指導が容易にできるボールにしたい着想から研究努力した結果、現在使用されている軟式野球ボールが誕生し、少年野球の普及とともに一般大衆スポーツとしても急速に発展した。1948年に天皇杯が下賜され、これを契機として軟式野球は発展の一途をたどり、現在全日本軟式野球連盟傘下チーム数は社会人チーム36,845、少年チーム20,284、大学協会、専門学校、還暦連盟の約120万人の競技人口となった。(https://jsbb.or.jp/)
- 注78 1986年山梨県で開催された国民体育大会。都道府県対抗、各都道府県持ち回り方式で毎年開催され、1961年からは、国のスポーツ振興法に定める重要行事の一つとして、日本スポーツ協会・文部科学省・開催地都道府県の三者共催で行われている。2011年からは、スポーツ基本法第26条に定められている。(https://www.japan-sports.or.jp/kokutai/tabid708.html)
- 注79 天皇賜杯全日本軟式野球大会の第41回大会、福島で開催。54チームが参加。(https://jsbb.or.jp/tournaments/tenno-shihai.html)
- 注80 (財)全日本軟式野球連盟で1982年～1986年会長を務めた。
(財)全日本軟式野球連盟50年史編集委員会、『財団法人 全日本軟式野球連盟50年史』((財)全日本軟式野球連盟、1995) pp. 413-414.
- 注81 (財)全日本軟式野球連盟で1982年～1986年理事長を務めた。

- (財)全日本軟式野球連盟50年史編集委員会、『財団法人 全日本軟式野球連盟50年史』pp. 413-414.
- 注82 元国家体育総局局長。1962年中国共産党入党。1958年に江蘇省男子バレーボールチームで活躍し、1962年に国家男子バレーボールチームに入った。(http://2012.sina.com.cn/star/yuan_weimin/index.html)
- 注83 元日本友好協会会長。1944年中国共産党へ入党。1972年中国日本友好協会副秘書長、秘書長、中国人民対外友好協会副会長、会長となり、中国日本友好協会副会長、会長を歴任した。(https://baike.baidu.com/item/%E5%AD%99%E5%B9%B3%E5%8C%96/5786185?fr=aladdin)
- 注84 1986年、第68回大会は天理高校が優勝。(www.yomiuri.co.jp/sports/koshien/summer/history/)
- 注85 陈显明、梁友德、杜克和、『中国棒球运动史』pp. 42-89.
- 注86 四人組は、1960年代から約10年続いた中華人民共和国の文化大革命を主導した4人の政治家、江青・張春橋・姚文元・王洪文を指す呼称。文革四人組とも呼ばれる。(田中仁、菊地一隆、加藤弘之、日野みどり、岡本隆司『新図説中国近現代史』p. 180.)
- 注87 ビンボン外交とは、1971年に愛知県名古屋市で行われた第31回世界卓球選手権に、中華人民共和国代表団が6年ぶりに出場し、大会終了後に中国がアメリカ合衆国の卓球選手を中国へ招待したことによる米中間を中心とした一連の外交をいう。これにより朝鮮戦争での交戦以来敵対してきた米中間の緊張緩和が実現、同年7月にヘンリー・キッシンジャー大統領補佐官が極秘に訪中、1972年2月には、リチャード・ニクソン大統領の訪中につながった。また日中国交正常化にもつながった。(大沢昇、『ワードマップ現代中国』pp. 80-86)
- 注88 1975年9月12日～9月28日に北京で開催され、台湾省を含む31の代表チームから12,497人の選手が参加した。(https://baike.baidu.com/item/%E4%B8%AD%E5%8D%8E%E4%BA%BA%E6%B0%91%E5%85%B1%E5%92%8C%E5%9B%BD%E7%AC%AC%E4%B8%89%E5%B1%8A%E8%BF%90%E5%8A%A8%E4%BC%9A/1734704?fromtitle=%E7%AC%AC3%E5%B1%8A%E5%85%A8%E5%9B%BD%E8%BF%90%E5%8A%A8%E4%BC%9A&fromid=12608653&fr=aladdin)
- 注89 1979年9月15日～9月30日に北京で開催され、31代表チームから15,189人の選手が参加した。(https://baike.baidu.com/item/%E4%B8%AD%E5%8D%8E%E4%BA%BA%E6%B0%91%E5%85%B1%E5%92%8C%E5%9B%BD%E7%AC%AC%E5%9B%9B%E5%B1%8A%E8%BF%90%E5%8A%A8%E4%BC%9A/1734727?fr=aladdin)
- 注90 国際オリンピック委員会(International Olympic Committee: IOC)は、スイスのローザンヌに本部を置く非政府のスポーツ組織である。IOCは、スイス民法典(第60条-第79条)に基づく協会(純民間団体)として構成されている。1894年にピエール・ド・クーベルタンとディミトリオス・ヴィケラスによって設立され、現代の夏季・冬季オリンピックの開催を担当している。IOCは、国内オリンピック委員会(NOC)および世界の「オリンピック・ムーブメント」(IOCの用語で、オリンピックに関わるすべての団体や個人を指す)を統括する機関である。(https://olympics.com/ioc/overview)
- 注91 1983年9月18日～10月1日まで上海で31省・市と解放軍が参加し、8,943人の選手が参加した。(https://baike.baidu.com/item/%E4%B8%AD%E5%8D%8E%E4%BA%BA%E6%B0%91%E5%85%B1%E5%92%8C%E5%9B%BD%E7%AC%AC%E4%BA%94%E5%B1%8A%E8%BF%90%E5%8A%A8%E4%BC%9A/1734802?fromModule=lemma-qiyi_sense-lemma)
- 注92 アジア野球連盟(Baseball Federation of Asia, 通称: BFA)は、アジア各国の野球協会が加盟している国際組織である。1954年に設立。(https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%A2%E3%82%B8%E3%82%A2%E9%87%8E%E7%90%83%E9%80%A3%E7%9B%9F)
- 注93 1987年11月20日～12月5日まで広州で行われた。37代表チームから7,518人の選手が参加した。(https://baike.baidu.com/item/%E4%B8%AD%E5%8D%8E%E4%BA%BA%E6%B0%91%E5%85%B1%E5%92%8C%E5%9B%BD%E7%AC%AC%E5%85%AD%E5%B1%8A%E8%BF%90%E5%8A%A8%E4%BC%9A/1734915?fromModule=lemma-qiyi_sense-lemma)
- 注94 中華人民共和国国家教育委員会(State Education Commission of the PRC)であり、全国教育事業の国务院元組織部門として教育部の前身が1985年に設立され、1998年に国务院政府組織部門として名称を国家教育委員会に変更した。(https://baike.baidu.com/item/%E4%B8%AD

- 85%B1%E5%92% 8C%E5%9B%BD%E7%AC %AC%E4%B8%89%E5%B1%8A%E8%BF%90 %E5%8A%A8%E4%BC%9A/1734704?fromtitle =%E7%AC%AC3%E5%B1%8A%E5%85%A8% E5%9B%BD%E8%BF%90%E5%8A%A8%E4% BC%9A&fromid=12608653&fr=aladdin)
- 百度百科. “中华人民共和国第四届运动会”.
<https://baike.baidu.com/item/%E4%B8%AD%E5%8D%8E%E4%BA%BA%E6%B0%91%E5%85%B1%E5%92% 8C%E5%9B%BD%E7%AC%AC%E5%9B%9B%E5%B1%8A%E8%BF%90%E5%8A%A8%E4%BC%9A/1734727?fr=aladdin>
- 百度百科. “中华人民共和国第五届运动会”.
https://baike.baidu.com/item/%E4%B8%AD%E5%8D%8E%E4%BA%BA%E6%B0%91%E5%85%B1%E5%92%8C%E5%9B%BD%E7%AC%AC%E4%BA%94%E5%B1%8A%E8%BF%90%E5%8A%A8%E4%BC%9A/1734802?fromModule=lemma-qiyi_sense-lemma
- 百度百科. “中华人民共和国第六届运动会”.
https://baike.baidu.com/item/%E4%B8%AD%E5%8D%8E%E4%BA%BA%E6%B0%91%E5%85%B1%E5%92%8C%E5%9B%BD%E7%AC%AC%E5%85%AD%E5%B1%8A%E8%BF%90%E5%8A%A8%E4%BC%9A/1734915?fromModule=lemma-qiyi_sense-lemma
- 百度百科. “中华人民共和国国家教育委员会”.
https://baike.baidu.com/item/%E4%B8%AD%E5%8D%8E%E4%BA%BA%E6%B0%91%E5%85%B1%E5%92%8C%E5%9B%BD%E5%9B%BD%E5%AE%B6%E6%95%99%E8%82%B2%E5%A7%94%E5%91%98%E4%BC%9A?fromModule=lemma_search-box
- Baseball Federation of Asia. “Asian Baseball Championship”
<https://www.baseballasia.org/BFA/include/index.php?Page=1-1>
- ブリタニカ国際大百科事典コトバンク. “文化大革命”
<https://kotobank.jp/word/%E6%96%87%E5%8C%96%E5%A4%A7%E9%9D%A9%E5%91%BD-128350>
- CiNii. “阿部馨”.
<https://cir.nii.ac.jp/crid/1410282679078762117>
- International Olympic Committee. “History of the IOC”.
<https://olympics.com/ioc/overview>
- 公益財団法人日本オリンピック委員会. “東京体育館”.
https://www.joc.or.jp/past_games/tokyo1964/memorialplace/3.html
- 公益財団法人野球殿堂博物館. “別当薫”. 殿堂入りリスト. <https://baseball-museum.or.jp/hall-of-famers/hof-087/>
- 公益財団法人野球殿堂博物館. “藤田元司”. 殿堂入りリスト. <https://baseball-museum.or.jp/hall-of-famers/hof-118/>
- 公益財団法人野球殿堂博物館. “広岡達明”. 殿堂入りリスト. <https://baseball-museum.or.jp/hall-of-famers/hof-105/>
- 公益財団法人野球殿堂博物館. “星野仙一”. 殿堂入りリスト. <https://baseball-museum.or.jp/hall-of-famers/hof-194/>
- 公益財団法人野球殿堂博物館. “池田恒雄”. 殿堂入りリスト. <https://baseball-museum.or.jp/hall-of-famers/hof-096/>
- 公益財団法人野球殿堂博物館. “石井連蔵”. 殿堂入りリスト. <https://baseball-museum.or.jp/hall-of-famers/hof-207/>
- 公益財団法人野球殿堂博物館. “金田正一”. 殿堂入りリスト. <https://baseball-museum.or.jp/hall-of-famers/hof-089/>
- 公益財団法人野球殿堂博物館. “松前重義”. 殿堂入りリスト. <https://baseball-museum.or.jp/hall-of-famers/hof-212/>
- 公益財団法人野球殿堂博物館. “長嶋茂雄”. 殿堂入りリスト. <https://baseball-museum.or.jp/hall-of-famers/hof-086/>
- 公益財団法人野球殿堂博物館. “王貞治”. 殿堂入りリスト. <https://baseball-museum.or.jp/hall-of-famers/hof-111/>
- 公益財団法人野球殿堂博物館. “当博物館について.”
<https://baseball-museum.or.jp/>
- 公益財団法人野球殿堂博物館. “山本英一郎”. 殿堂入りリスト. <https://baseball-museum.or.jp/hall-of-famers/hof-123/>
- 公益財団法人全日本軟式野球連盟. “天皇賜杯全日本軟式野球大会”.
<https://jsbb.or.jp/tournaments/tenno-shihai.html>
- 公益財団法人全日本軟式野球連盟. “連盟概要沿革”.
<https://jsbb.or.jp/>
- フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』. “アジア野球連盟”.
<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%A2%E3%82%B8%E3%82%A2%E9%87%8E%E7%90%83%E9%80%A3%E7%9B%9F>
- フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』. “アジア野球選手権大会”

- <https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%A2%E3%82%B8%E3%82%A2%E9%87%8E%E7%90%83%E9%81%B8%E6%89%8B%E6%A8%A9%E5%A4%A7%E4%BC%9A>
- フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』。 “土井正三”。
- <https://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%9C%9F%E4%BA%95%E6%AD%A3%E4%B8%89>
- フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』。 “公益財団法人日本野球連盟”。
- <https://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%97%A5%E6%9C%AC%E9%87%8E%E7%90%83%E9%80%A3%E7%9B%9F>
- フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』。 “池田善吾”。
- <https://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%B1%A0%E7%94%B0%E5%96%84%E5%90%BE>
- フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』。 “国際野球連盟”。
- <https://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%9B%BD%E9%9A%9B%E9%87%8E%E7%90%83%E9%80%A3%E7%9B%9F>
- フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』。 “高校野球優勝チーム”。
- <https://ja.wikipedia.org/wiki/%E7%AC%AC67%E5%9B%9E%E5%85%A8%E5%9B%BD%E9%AB%98%E7%AD%89%E5%AD%A6%E6%A0%A1%E9%87%8E%E7%90%83%E9%81%B8%E6%89%8B%E6%A8%A9%E5%A4%A7%E4%BC%9A>
- フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』。 “国松彰”。
- <https://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%9B%BD%E6%9D%BE%E5%BD%B0>
- フリー百科事典『ウィキワンド (Wikiwand)』。 “AA世界野球選手権大会”。
- <https://www.wikiwand.com/ja/AA%E4%B8%96%E7%95%8C%E9%87%8E%E7%90%83%E9%81%B8%E6%89%8B%E6%A8%A9%E5%A4%A7%E4%BC%9A>
- フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』。 “李夢華”。
- <https://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%AD%A3%E5%8A%9B%E4%BA%A8>
- フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』。 “中村稔”。
- https://ja.wikipedia.org/wiki/%E4%B8%AD%E6%9D%91%E7%A8%94_%E6%8A%95%E6%89%8B
- フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』。 “二宮忠士”。
- <https://ja.wikipedia.org/wiki/%E4%BA%8C%E5%AE%AE%E5%BF%A0%E5%A3%AB>
- フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』。 “越智正典”。
- <https://ja.wikipedia.org/wiki/%E8%B6%8A%E6%99%BA%E6%AD%A3%E5%85%B8>
- フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』。 “荻村伊智朗”。
- <https://ja.wikipedia.org/wiki/%E8%8D%BB%E6%9D%91%E4%BC%8A%E6%99%BA%E6%9C%97>
- フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』。 “大橋勲”。
- <https://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%A4%A7%E6%A9%8B%E5%8B%B2>
- フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』。 “大友工”。
- <https://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%A4%A7%E5%8F%8B%E5%B7%A5>
- フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』。 “世界野球連盟”。
- <https://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%9B%BD%E9%9A%9B%E9%87%8E%E7%90%83%E9%80%A3%E7%9B%9F>
- フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』。 “関本四十四”。
- <https://ja.wikipedia.org/wiki/%E9%96%A2%E6%9C%AC%E5%9B%9B%E5%8D%81%E5%9B%9B>
- フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』。 “篠原一豊”。
- <https://ja.wikipedia.org/wiki/%E7%AF%A0%E5%8E%9F%E4%B8%80%E8%B1%8A>
- フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』。 “ピーター・オマリー”。
- <https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%94%E3%83%BC%E3%82%BF%E3%83%BC%E3%83%B%E3%82%AA%E3%83%9E%E3%83%AA%E3%83%BC>
- フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』。 “正力亨”。
- <https://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%AD%A3%E5%8A%9B%E4%BA%A8>
- フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』。 “田中久幸”。

- <https://ja.wikipedia.org/wiki/%E7%94%B0%E4%B8%AD%E7%A7%80%E5%A4%AA>
フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』。 “徐寅生”。
https://baike.baidu.com/link?url=0DK31nmSiE1pevXoKPCRGnKU1Q4asT3FCDKGUHEc7oxh8g325KKhOmXtosWp8yB1rT6B2CXzSCN8bwkSzf2FajLkzkAs-b-crSs3eYUff_Yw932-fzN7TEW9CMpuZph
フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』。 “山田潔”。
<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%B1%B1%E7%94%B0%E6%BD%94>
人民中国インターネット版。 “「中国認識の窓」として”。
<http://www.peoplechina.com.cn/maindoc/html/35year/guanlian/0610teji-3.html>
ナショナルスタジアムツアーズ。 “後楽園球場跡地”
<https://nationalstadium-tours.com/?area=32460>
日本中国文化交流協会。 “日本中国文化交流協会とは”。
<http://www.nicchubunka1956.jp/>
- 日本ポニーベースボール協会。 “ポニーとは”。
http://www.pony-japan.com/p_league/league/。 <https://pony-japan.com/about/pony/>
日本スポーツ協会。 “国民体育大会第41回大会”。
<https://www.japan-sports.or.jp/kokutai/tabid708.html>
日本野球道。 “1980年アマチュア野球選手権大会日本代表”。
<http://japanbaseball.web.fc2.com/ibaf/worldcup1980.html>
U途人文网。 “梁扶初”。
<http://famous.usatour.com.cn/history/3/liangfuchu.html>
新浪奥运。 “袁伟民”。
http://2012.sina.com.cn/star/yuan_weimin/index.html
横浜スタジアム。 “横浜スタジアムの歴史”。
<https://www.yokohama-stadium.co.jp/about/history/>
読売新聞オンライン。 “全国高校野球選手権（夏の甲子園）の歴代優校校”。
www.yomiuri.co.jp/sports/koshien/summer/history/

表1. 1945年～1989年までの中国における主な野球活動の概略年表

西暦	中国での主な野球活動
1947	台湾の石炭野球チームが上海に訪問し、復旦大学野球チームと熊貓野球チームと試合を行った。上海東華球場はこれまででかつてない程の黒山の人だかりとなった。
1951	四川にある銅梁で西南砲兵第1回運動会を行い、野球は主に新しく軍隊に入った青年からなる砲校隊と文工団および砲兵隊機関からなる砲直隊が対戦した。
	西南軍区で第1回運動会が行われ、野球に参加したチームは、砲兵、公安、西康、雲南、川西、川北軍分区であった。
1952	天津に中学生で組織された北斗星野球チームが設立された。そのコーチは、国内外に著名な華僑であり、日本の元プロ野球選手、劉瀨章と仲間の鮑賢慶であった。彼らの力を尽くして優秀な選手を育てて、天津市、河北省代表チームが参加した全国野球大会で良い成績をあげて、天津地区の野球を大いに発展して育成した。
	北京で中国人民解放軍の第1回全軍運動会が行われた。
	上海にある華東海軍司令部が海軍体工隊を正式に成立させ、梁扶初が海軍野球チーム指導の初担当として招聘され、厳しい練習が行われた。
1953	南京軍事学院内で北軍区野球チームと海軍体工隊が友好試合を行った。
	西南軍区の戦闘チームは重慶で華北の戦友チームを迎え、西南地区の巡回公開競技を行った。
1954	梁扶初が招聘を受けて四川に入り、戦闘チームのコーチとなり、賀龍から親身な接見を受けた。
	梁扶初は初めて上海遠征にチームを率いて相継いで華東軍区、華東工程兵、華東公安兵チームおよび上海青年チーム、高校チーム、上海連合チームなどと、淮海路広場で友好試合を行って多勝少敗であった。
1955	各野戦軍の編制を撤回して取り消した後、北京軍区は戦友野球チームが、華北、西南、華東3大軍区の主力を集中し、その実力はさらに向上した。
	各大行政区および大野戦軍制度が廃止され、部隊の位階制が実施され、軍縮再編成することで、部隊の野球活動の発展はこれによって停滞した。
1956	国家体育運動委員会は野球を推進するために全国野球公開競技会を行い、毎年全国的な野球大会を行って第1回全国野球大会のための準備を進め、各省・市の野球発展を促進した。
	北京では、清華大学、北京大學、北京工業学院、北京外国語学院、北京地質学院、北京師範大学が相継いで野球チームをつくり、毎年一度、高校野球の試合を行った。それ以後、また、北京化工学院、機械学院、北方交通大学、政法学院、体育学院、医学院等の野球チームが増加し、参戦する大学が次第に増加したため、2つの地区に分けて試合を実施した。
1957	沈陽で全国8地区野球選手権大会が行われた。
1958	北京市第1回運動会が行われ、野球は高校と各区・省が参加し、北京体育学院から主に選ばれた選手で組織されたチームである高校チームが優勝した。
	上海、旅大において全国野球地区対抗戦が11の地区から12の代表チームが参加して行われた。上海では上海紅隊が、旅大では北京がそれぞれ優勝した。
	成都体育学院で全国6ヶ所の体育学院ソフトボール対抗戦を実施し、この大会は1959年の第1回全国運動会の野球種目を創設する布石となった。
1959	北京で第2回全軍運動会が行われ、野球は各軍の14の代表チームが参加し、北京軍区チームが優勝した。
	北京で第1回全国運動会が行われ、野球は正式種目となり、各省、市、自治区と解放軍を合わせて23チームが参加して、北京体育学院の選手が主なメンバーで構成された北京チームが優勝した。
1960	全国野球地区対抗戦には、24の省市、解放軍野球チームが参加した。ある一部の参加チームは、一般大衆による野球活動にて作られ、地方運動会を経て選抜組織されたものであった。
	全国6ヶ所の体育学院では、野球・ソフトボールが並んで必修課程として取り上げられ、教学大綱が編集された。
1961	大躍進政策によって国内の経済が困窮し、野球の大会がなくなったために、活動を中断した。
1972	1961年から1971年までの11年間野球活動は中断されたが、過去の野球の発展が、比較的良かった上海、天津が一番早く、練習を復活させ、野球チームを再結成した。
1974	国家体育運動委員会は西安で全国10地区の野球・ソフトボール大会を行い、13年間中断した全国大会レベルの野球大会を復活させた。
	6ヶ所の体育学院が全て野球・ソフトボール課程を復活し、専門班を開設し、代表チームを成立させた。

西暦	中国での主な野球活動
1975	北京にて第3回全国運動会が行われ、野球は正式試合種目となり、11チームが参加し、天津が優勝した。
1976	全国野球調整大会が北京で行われ、参加チームは北京、八一、天津、上海、甘肅、沈陽の6チームであったが、唐山大地震発生のために途中で中止となった。
1977	全国野球大会が大連で行われ、12チームが参加し、北京チームが優勝した。
1978	全国野球大会に参加したチームは14チームに増加し、全国大会の復活以来最多の参加となり、北京が優勝した。
1979	3月に中国野球・ソフトボール協会が設立された。11月に中国が国際オリンピック委員会での議席の復活を遂げた。 第4回全国運動会が北京で行われ、野球は正式種目として置かれ、14の省、市、解放軍チームが試合に参加し、北京が優勝した。
1980	全国野球リーグ戦大会は10チームが参加して行われ、甲組は甘肅チームが、乙組は四川チームが優勝した。 全国野球特別強化チームの大会が北京で行われ、天津チームが優勝した。
1981	中国が国際アマチュア野球連合会への加入が認められ、中国野球・ソフトボール協会の指導者が国際組織で職務担当となった。 全国野球リーグ戦大会は7チームが参加して行われ、北京チームが優勝した。 全国野球特別強化チームの大会が大連で6チームが参加して行われ、北京チームが優勝した。
1982	全国野球リーグ戦大会に成年組5チームと青年組5チームが参加し、西安で行われた第1リーグ戦で成年組は上海が1位、青年組は陝西が1位となった。第2リーグ戦は渡口で行われ、成年組は上海が1位、青年組は遼寧が1位となった。 全国特別強化野球チームの大会が蘭州で6チームが参加して行われ、天津が優勝した。 中国で初めて労働者の野球組織である北京外国語学院の親善野球倶楽部が設立された。
1983	野球は第5回全国運動会の正式種目から外れた。 全国野球リーグ戦大会は甲組は5チームが、乙組は5チームが参加し、3リーグ戦で行われ、3リーグ戦の総累計得点で甲組は天津が、乙組は遼寧がそれぞれ優勝した。 国家体育運動委員会の支持を得て第1回全国高校野球招待大会を大連工学院にて11の普通高校と2つの体育学院が参加して行われ、天津南開大学が優勝、広州体育学院が2位となった。 北京市親善杯野球大会が北京市野球協会連合の主催により労働者8チームが参加して行われた。 親善野球倶楽部が、日本から訪問の早稲田大学労働者野球チームやアメリカから訪問のロサンゼルス中高労働者野球チームと対戦した。
1984	全国野球リーグ戦大会は2リーグ戦で8チームが参加し、第1リーグ戦は陝西で、第2リーグ戦は福健で行われ、甲組は北京が、乙組は遼寧が優勝した。 全国野球選手権大会を2リーグ戦の間に8チームが参加して北京で行われ、北京が優勝した。 第2回全国高校野球招待大会が大連で大連工学院が主管となり、8チームが参加して行われ、天津南開大学が優勝した。 中国野球・ソフトボール協会主席の魏明がアジア野球連盟の副主席に選ばれ、秘書長の唐風翔はアジア野球連盟の青年委員会委員に選ばれた。
1985	全国野球リーグ戦大会は、2リーグ戦で四川と大連で8チームが参加して組み分けせずに行われ、四川が優勝した。 第3回全国高校野球招待大会が上海で上海華東化工学院が主管となり、5チームが参加して行われ、上海華東化工学院が優勝した。 中国で初めて工場経営労働者野球チームとして北京クレーン工場労働者野球チームが誕生した。 第13回アジア野球選手権大会がオーストラリアのパースで開催され、中国、中国台北、日本、南朝鮮とオーストラリアの5ヵ国が参加して日本が優勝し、中国は全敗して最下位となった。
1986	全国野球選手権大会が蘭州で7チームが参加して行われ、四川が優勝した。 全国野球リーグ戦大会が2リーグ戦で陝西と四川で行われ、四川が優勝した。 全国野球選手権大会が長春で7チームが参加して行われ、天津が優勝した。 第4回全国高校野球招待大会が北京で北京北方工業大学が主管となり、5チームが参加して行われ、大連医学院が優勝した。

西暦	中国での主な野球活動
1986	中国野球協会は、天津体育学院を野球の中国第一推進校とし、児童、少年、青年の一貫指導が始まった。
	北京クレーン工場労働者野球チームが北京市親善杯野球大会と全国青年野球優勝大会へ招かれ出場した。
	上海静安区住宅建築工程会社労働者野球チームが上海市野球大会に参加した。上海では、福州二化、福州商儲、済南製鋼所、齊齊哈爾汽機工場、中国第二汽車製造工場などの労働者野球チームができた。
	国家体育運動委員会が厦門で第2回全国野球訓練業務会議を開催し、児童、少年からの一貫した育成訓練体制を設立した。
	中国野球協会は第2回全国野球訓練業務会議において、野球の発展的方策と方針を確定し、近い将来にアジア選手権において、グアム島チームを負かして4位を獲得するための奮闘目標を設定した。
1987	第6回全国運動大会が大連で行われ、野球は正式種目となり、8チームが参加して行われ、四川が優勝した。
	全国野球選手権大会が長春で7チームが参加して行われ、北京が優勝した。
	第5回全国高校野球招待大会は、全国野球選手権大会に改称し、沈陽で東北工学院が主管となり、5チームが参加して行われ、東北工学院が優勝した。
	北京クレーン工場労働者野球チームが、北起杯全国青年労働者野球大会へ出場した。
	第1回全国労働者野球招待大会を福州二化チーム、黃埔港チーム、北京クレーン工場チーム、上海静安区住宅建築工程会社チーム、北京第二汽車修理工場チームの5チームが参加し、別に北京、天津、渡口から労働者と異なる3チームが参加して行われた。
	第14回アジア野球選手権大会が日本の東京で行われ、日本、中国、中国台北、南朝鮮、オーストラリア、グアム島、インドの7カ国が参加し、中国は6位となり、中国台北チームが優勝した。
1988	全国野球リーグ戦大会が2リーグ戦で陝西と福健で7チームが参加して行われ、天津が優勝した。
	全国野球特別強化チーム調整大会が天津の天津体育学院で5チームが参加して行われ、天津体育学院が優勝した。
	第6回全国高校野球選手権大会が上海で6チームが参加して行われ、上海華東化工学院が優勝した。
	天津体育学院少年チームが日本の千葉県大会で優れた成績をあげた。
	天津体育学院児童チームが全国冬期訓練大会で2位となった。
	第2回全国労働者野球招待大会が北京で行われ、齊齊哈爾市和平機械工場、福州二化学工場、上海建築防水材料会社、広州港事務局、北京第二汽車修理工場、中国第二汽車製造工場のチームの6チームが参加し、中国第二汽車製造工場が優勝した。
	世界青年野球選手権大会がオーストラリアで開催され、キューバ、アメリカ、カナダ、中国台北、南朝鮮、オーストラリア、中国、イタリアの8カ国が参加し、中国は全敗して最下位となった。
1989	全国野球リーグ戦大会が2リーグ戦で陝西と成都で8チームが参加して行われ、天津が優勝した。
	2リーグ戦の間に長春市で青年組だけの希望杯リーグ戦が、6チームが参加して行われ、大連が優勝した。
	第7回全国高校野球選手権大会と第1回体育学院野球選手権大会が北京で普通高校が4校、体育学院が6校の計10校の160名が参加して行われ、普通校では上海華東工学院が、体育学院では天津体育学院がそれぞれ優勝した。
	天津体育学院青年チームのメンバーが天津チームに入り、モスクワで行われた4カ国招待試合において好成績をあげた。
	天津体育学院の2名の少年が主力となって参加した世界大会で3位となった。
	北京体育師範学院少年野球チームが第1回AA級世界少年野球選手権大会で3位となった。
	第3回全国労働者野球招待大会が福州で行われ、中国第二汽車製造工場、広州港事務局、厦門国際飛行場、福州二化学工場の4チームが参加し、中国第二汽車製造工場が優勝した。
	二化杯国際社会人野球招待大会が福州市にて行われ、日本航空会社チームと朝鮮平壤チームが招待されて参加し、朝鮮平壤社会人チームが優勝した。
	第15回アジア野球選手権大会が南朝鮮の漢城で行われ、中国台北、中国、日本、グアム島、フィリピン、インド、南朝鮮の7カ国が参加し、試合結果は、中国台北と日本、南朝鮮が1位に並び、中国チームは4位となった。

表2. 1972年の日中国交正常化から1989年までの日中野球相互交流活動の概略年表

西暦	中国における日中野球交流活動	日本における日中野球交流活動
1975	神戸市の友好の船野球チームが天津を訪問し、天津チームと公開競技を行い、四川、甘肅、八一、陝西などのチームが見学した。	
	愛知工業大学チームが訪問し、西安、成都体育学院、北京、天津、沈陽、八一、上海の7つの野球チームが西安、北京、上海の3地点に分かれて親善試合をし、中国チームは全敗した。	
1976	別当薫が団長で山田潔、大橋勳が団員であるプロ野球コーチ団が、初めて中国へ野球指導に来て、北京、八一、上海チームの練習で指導を行った。	
	東京六大学リーグ戦で優勝した、日本一の大学野球チームの法政大学チームが訪問した。上海、西安の両地区で上海、北京、陝西、甘肅、八一等の野球チームと5試合行った。実力が相当にかけ離れて差があり、5試合全て中国チームは負けた。	
1977		張毅を団長とする野球視察団が初めて日本へ訪問した。随行者は野球コーチの曹岳鐘（北京）、王鋭（天津）、張舒慤（八一）および甘肅チームの投手の王永平などであり、東京、名古屋、大阪、横浜で野球を視察した。
1978		北京チームが代表となる中国野球学習班が野球技術を学びに訪問した。東京ではプロ野球の読売巨人軍の練習を、横浜では大洋の練習を大阪では阪急の練習を受けた。また、東京では社会人野球の日本鋼管の練習を受けた。
1979	愛知工業大学チームが2度目の招きに応じて北京、上海を訪問した。北京では、北京、天津、八一チームと3試合して全勝した。上海では、上海、甘肅、陝西チームと3試合を行って全勝した。	
	山田潔団長の元プロ野球選手からなる野球コーチ団が招きに応じて来訪し、北京、天津チームの練習を指導し、この活動と合わせて全国野球コーチ練習班を指導した。また、愛知工業大学チームの副審判長の渡辺恒夫が第1回審判講習会を行った。	
1980	プロ野球巨人軍の元コーチの国松彰と中村稔が四川省の成都に招待され、四川チームと成都体育学院チームに野球指導をした。	中国野球視察団が日中文化交流協会と毎日新聞社の招待を受け、何振梁、蔡季舟、張金龍、呉祿成、謝朝権、梁友徳の6名が訪問した。日本で行われた世界野球連盟会議に参加し、東京で行われた第26回世界アマチュア野球選手権大会を視察した。また、プロ野球チーム、大学チーム、高校チーム、少年チームの野球の試合と練習を視察した。さらに、野球場と設備を参観した。
	横浜市野球コーチ一行4人が上海に招待され、上海野球チームに対して4日間の野球指導を行った。	
	社会人野球の本田技研チームが北京、成都、上海を訪問し、成都と上海で中国の野球チームと8試合して全勝した。また、四川チームと合同練習を2回行い、各チームのコーチによる座談会を実施した。	

西暦	中国における日中野球交流活動	日本における日中野球交流活動
1981	社会人野球の日本石油チームが大連、天津の両地を訪問し、国家合宿練習チームと2試合して勝った。また、北京、上海、天津、甘肅、四川の各々のチームに勝った。	中国野球チーム一行25名が東日本へ渡り、友好訪問と親善試合をした。これは中国野球チームの最初の日本訪問であり、社会人野球の三菱重工チーム、日本生命チーム、全東海チーム、新日鉄チーム、本田技研チーム、日本石油チームと各1試合行い全敗した。
1982	全国人民代表大会常務委員会副委員長、中国野球協会名誉会長の廖承志が北京において、日本の読売新聞社長であり、プロ野球の読売巨人軍のオーナーである正力亨夫妻と随員と会見した。	中国野球コーチ班一行7人が招待されて日本を視察した。団長の唐風翔、通訳の譚顔平安、天津チームの林徳望、上海チームの張璋、四川チームの杜克和、陝西チームの張孝軍、甘肅チームの馬尚金であった。宮崎市巨人軍冬季キャンプ場で、巨人軍の総監督藤田元司、助監督王貞治の情熱的対応と指導を視察した。
	プロ野球巨人軍の元選手であった土井と関本の二人が北京チームの野球指導のために北京に招待され、同時にまた、全国各地からのコーチ訓練班にも野球指導を行った。	北京チームは、静岡県少林寺チームから招待され、友好訪問した。
	東北地区の大学生野球リーグで優勝した東北福祉大学チームが北京を訪問し、天津チームと北京チームと親善試合をし、北京チームが3対1で勝利した。これは日中の野球チームが1975年に開始した国際交流以来、中国へ訪問した日本の野球チームからの記念すべき初勝利であった。	
	愛知大学リーグの愛知大学チームが訪問し、北京チームが3対2で勝利した。このことは中国野球技術レベルが一定に向上したことを反映した。	
1983	社会人野球の新日鉄チームが訪問し、北京から西安へ行き、北京、天津、四川、甘肅、陝西チームと5試合行い、北京チームに8対2、天津チームに12対1で勝ち、その他の各試合には大勝利を勝ち取った。	中国野球チームは日本を訪問し、7試合をして全敗した。
	有名なコーチである金田正一と早稲田大学体育教授の阿部馨が大連に招待され、中国の集中調整合宿の青年野球選手を指導した。	
1984	野球コーチの山田浩、二宮忠士が甘肅蘭州に招待され、甘肅省野球チーム・ソフトボールチームを指導し、また、全省のコーチ訓練班を同時にこの機会に指導した。	第2次中国野球コーチ一行10人が招待され、宮崎市の巨人軍冬季キャンプ地を訪問した。団長は郭涌恩、通訳が林徳望、四川チームの徐明輝、上海チームの余仏基、甘肅チームの王永平、天津チームの王弟、選手の劉研軍、樓建平、焦益、王健であった。
	熊本県にある社会人野球の熊本市チームのここにこ堂野球チームが北京と上海の両地を訪問して3試合を行い、熊本市チームが2勝1分けした。	
1985	日本少年野球協会理事長の伊藤慎介等が天津、北京、上海、蘇州を訪問し、中国野球・ソフトボール協会の指導者と会見した。	第3次中国野球コーチ班が招待され、宮崎市巨人軍冬季キャンプ地を訪問した。団長と通訳は、北京チームのコーチの顔平、安担任であり、コーチは、北京チームの魯学明、甘肅チームの楊国祥、四川チームの劉宗祿、遼寧チームの李兆文武、天津チームの那履同であった。訪問期間において王貞治等の17講課、すべて模範技術指導を受けた。国へ帰って資料集に整理し『中国野球科学的技術』上に発表した。

西暦	中国における日中野球交流活動	日本における日中野球交流活動
	元日中文化交流協会常務理事事務局副局長であった村岡久平が一家で来訪した。	北京野球チームの優秀投手の李兵が、にこにこ堂社長の林庫治（中国人）に招待され、4月14日から社会人野球の熊本県熊本市にこにこ堂野球部で野球技術の学習をし、1986年10月10日に学習を終えて帰国した。
	野球雑誌社の『ベースボール・マガジン』社の社長の池田恒雄を団長とする訪問団一行6人が北京を訪問した。	四川、北京、天津、上海の野球チームの優秀投手の鄭厚強、李維杰、王振春、張東旭、楼建天の5人が、天津チームのコーチの林徳望が団長となり、社会人野球日本一の横浜市の日産自動車社野球部で投手の技術を学習した。
	関西地区大学野球チーム一行25人が、第2回目の訪問をし、北京で北京チームに0勝6敗、上海で上海チームに4勝6敗であった。その後、1試合だけ軟式野球（中国において未開発）の準硬式（TOP）ボールで試合を行い、日本チームが上海チームに16対0で勝った。	
	大分県の高校野球チームが武漢を訪問し、武漢第12中学チームと親善試合をし、大分県の高校野球チームが勝った。	
	神奈川県川崎市の社会人野球チームが訪問し、遼寧阜新において、阜新には野球チームがないため大連の第3中学生チームと親善交流試合をした。	
	中国野球・ソフトボール協会は、有名な野球コーチの篠原一豊と池田善吾を招待して秋、冬の両シーズンに分けて北京、昆明の両地で彼らは優秀な野球選手を指導した。同時にコーチ訓練班も指導した。	
	高校野球優勝チームが昆明を訪問し、昆明で国家野球チームと合同練習を行い、4試合親善試合を行って2勝2敗であった。	
1986	高等学校野球連盟副会長の小松博等の一行が招待され、北京を訪問し、中国野球協会副会長の蔡季舟等と会談を行い、双方が今後の交流を続けて協力していくことに意見が一致した。国家体育運動委員会副主任の徐寅生は、小松博会長一行と会見をした。	中国野球チームが訪問し、大阪、名古屋、東京において、社会人野球の本田技研チーム、豊田チーム、三井銀行チーム、コンピューター企業（IBM）チーム等と親善試合を4試合行った。本田チームとの対戦は雨のため4回で終了し、その他の3試合は1勝2敗であった。その中、中国野球チームは13対9で三井銀行チームに勝ち、これは中国チームが日本の社会人野球チームとの対戦の中で記念すべき初勝利であった。
	米国プロ球団ドジャースのオーナーのピーター・オマリーが“天津体育学院ードジャース球場”を建造寄贈し、落成式が行われた。9月11日の夜に北京人民大会堂の湖北レストランにおいて国家体育運動委員会主任の李夢華が宴会を行った。中国野球協会会長の魏明、天津体育学院院長の陳家奇等が出席し、アメリカからの出席者以外に日本からも東海大学学長の松前重義、国際アマチュア野球連盟副会長の山本英一郎、朝日新聞社の石井連蔵、NHKテレビ野球評論家の星野仙一と越智正典等が参加した。	上海市野球チームは、日本へ訪問し、神戸、大阪、京都、八尾を訪問し、5試合親善試合をして1勝4敗であった。

西暦	中国における日中野球交流活動	日本における日中野球交流活動
	日本軟式野球連盟会長の藤井森男夫妻、秘書長の五味博一および顧問の村岡久平から成る日本軟式野球中国訪問団が、中国野球協会の招待によって北京と上海の両地を訪問し、北京では国家体育運動委員会主任の李夢華、副主任の袁仏民と中日友好協会会長の孫平化は相次いでこの代表団と会見した。	日本軟式野球連盟の招待で中国野球協会の郭連剛、博徳厚、李友林の3人が、第41回国民体育大会の開会式と全日本軟式野球大会の開会式に出席し、試合を見学し、日々座談会を行った。
	有名なコーチ篠原一豊と池田善吾が、第2回目の招待を受け、天津、厦門で青年野球合同訓練チームを指導した。	
	高校野球優勝チームが招待され、福建省厦門を訪問し、国家青年合同チームと2試合親善試合をして1勝1敗であった。遼寧青年チームと四川渡口青年チームとの両試合には大差で勝った。日本チームに同行した審判の中西明は同時に審判員の指導を実施し、厦門での審判員の冬期試合合宿に参加していた審判員が研修会に参加した。	
1987	社会人野球の東海電報電話（NTT）チームが招待され、北京と天津の両地を親善訪問し、北京チーム、国家合同訓練チーム、天津チーム、四川チームと4試合を行い全勝した。	第4回中国野球コーチ班が招待され、宮崎市の巨人軍冬季キャンプ地を訪問した。メンバーは、団長が劉学信、通訳が候樹棟、コーチは天津チームの王鋭、于春恒、甘肅チームの馬保勇、上海チームの産輝、陝西チームの郭孔強であった。巨人軍の2軍の練習への参加と観察および野球選手の人材選抜、敏捷性向上、体力作りと基本技術練習をテーマとしての聴講を行った。
	高校野球優勝チームが、第3回目の訪問をし、広州、厦門の両地を訪問した。中国青年野球合同訓練チームと上海チームと厦門と広州の両地で各々対戦し、来訪チームが全勝した。	中国野球協会の副会長の蔡季舟と国際部長の孫柏青が日本へ招待され、高校野球の第59回春の甲子園大会の試合を参観した。

